

アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）

第3巻

—全訳—

秋山 学

序.

以下に掲げるのは、初期ギリシア教父の一人アレクサンドリアのクレメンス（150–215）の主著『ストロマテイス』（『綴織』）より、その第3巻の全文拙訳である。筆者は先に、クレメンスの著作のうち、『プロトレプティコス』（『ギリシア人への勧告』、全1巻）および『パイダゴゴス』（『訓導者』、全3巻）に関して、その全訳を筑波大学の紀要類に順に掲載した¹。また『ストロマテイス』の第1巻および第2巻は、本号と同時期にやはり筑波大学の紀要に掲載され公刊される予定である²。既刊の拙稿に記したように、註釈や訳文の整備は、教文館版（「キリスト教教父著作集」）による公刊の際に本格的に取り組む予定であり、本稿はあくまでも試訳としての意味しか持たない。

『ストロマテイス』は、クレメンスの神学の核心部分を成す「覚知」（者）の思想が展開される主要著作であり、本第3巻では、「結婚」をめぐるクレメンスの神学が開陳される。その主旨は、克己（禁欲）と放蕩（好色）という二つの極端を退け、結婚生活・修道独身生活の両形態を

¹ 「アレクサンドリアのクレメンス『プロトレプティコス』（『ギリシア人への勧告』）—全訳—」、筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』57, 1–82, 2010.3, 「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』（『訓導者』）第1巻—全訳—」、同『文藝言語研究 文藝篇』59, 1–62, 2011.3, 「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』（『訓導者』）第2巻—全訳—」、同『文藝言語研究 言語篇』59, 1–74, 2011.3, 「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』（『訓導者』）第3巻—全訳—」、筑波大学大学院人文社会科学研究科古典古代学研究室刊『古典古代学』第3号, 25–76, 2011.3.

² 「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）第1巻 —全訳—」、筑波大学大学院人文社会系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』63, 2013.3 刊行予定、および「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）第2巻 —全訳—」、同『文藝言語研究 言語篇』63, 2013.3 刊行予定。

恵みであるとする穏当なものであり、極論を唱える異端を反駁する中で、いわゆるグノーシス諸派の奇怪な教説が引用される。したがって本第3巻は、グノーシス主義研究にとっての貴重な史料でもある³。

クレメンスの主張は、後の東方典礼教会が奉ずる結婚の神学の基調を成すものであるが、ローマ典礼教会が奉ずる司祭独身制を軸とする方針とは相容れない。このこともあってか、16/7世紀までクレメンスは聖人として12月4日に記念されていたものの、ローマ教皇クレメンス8世(在位1592-1605)の下で『ローマ殉教者伝』が改訂された際、枢機卿バロニウス(1538-1607; 1596年から没年まで枢機卿)の進言によって聖人から外されてしまった⁴。ベネディクト14世(在位1740-1758)もクレメンス8世の方針を継承している⁵。

邦訳に際し、底本としては、オットー・シュテーリン(Otto Stählin, 1868-1949)の校訂になる校訂版テキスト(Stromata Buch I-VI / Clemens Alexandrinus ; herausgegeben im Auftrage der Kirchenväter-Commission der Königl. Preussischen Akademie der Wissenschaften von Leipzig : Hinrichs, 1906 ; Die Griechischen christlichen Schriftsteller der ersten drei Jahrhunderte, Bd. 2)を用い、近代語訳としては、イタリア語訳(Clemente Alessandrino, *Gli Stromati: Note di vera filosofia*, Introduzione, traduzione e note di Giovanni Pini, Milano 1985), スペイン語訳(Clemente de Alejandría, *Stromata II-III: Conocimiento religioso y continencia auténtica*, Introducción, traducción y notas de Marcelo Merino Rodríguez, Madrid 1998), および英訳(*Clement of Alexandria: Stromateis, Books One to Three*, translated by John Ferguson, Washington, D.C., 1991)を参照した。

³ 一般書として、筒井賢治『グノーシス 古代キリスト教の《異端思想》』(講談社選書メチエ 313, 講談社, 2004年)。

⁴ 一説によればこれはもっと早く、教皇シクストゥス5世(在位1585-1590)の在位期間中(1586年)に行われたとされる。いずれにしてもバロニウスの進言による。

⁵ 1748年、『ローマ殉教者伝』の再改訂に際してである。その理由としては「彼の生涯の多くが不明であり、教会に公的な崇敬の儀礼が見られず、彼の教説のいくつかは、誤りではないにしても、少なくとも怪しい」とされる。cf. C. Bigg, *The Christian Platonists of Alexandria*, Oxford 1968, 320.

各章の冒頭に掲げた内容小見出しは、ファーガスの英訳から適宜採用したものである。ファーガスは『ストロマテイス』の全訳を完遂することなく、第3巻の訳了後に急逝した（1989年）。幸いにして本拙訳により、第1巻から第3巻までの邦訳が完了したことになる。第4巻以降に関しても、2013年度に継続して訳稿を準備する予定である。

I. ウァレンティノスとバシレイデスによる結婚に関する見解.

1.1) さて、ウァレンティノス⁶派の人々は、神的な発出から結婚の絆を導き出し、結婚を是認している。しかるにバシレイデス⁷派の人々は、<弟子たちが「果たして結婚しない方が優れているのでしょうか」>と尋ねたときに、主は<すべての人々がこの論を受け容れられるわけではない。結婚しない者には、生まれつきの者もあるが、強いられてそうなった者もある>（マタイ 19,11 以下）と答えたことを引く。2) しかるに彼らは、この言葉を次のように解釈する。<ある人々は生まれつき、女性に対する本性的な嫌悪心を持っており、彼らはこの本性的な気質を巧みに用い、結婚せずにいるのだ。3) 彼らこそ「生まれつきの独身者」である。一方「強いられての独身者」とは、わざとらしい禁欲者のことを指し、その者どもは名声への思いに拘束されて自らを抑制している。ほかに偶然性器切断することになった者もあり、彼らは「不可抗力によって」独身者となった。したがって「不可抗力による」者は、「ロゴスによって」独身者となったわけではない。4) しかるに永遠の王国のために、自らを独身者となす者は、結婚によって生ずる事柄を責務と受け取るが故に、家族を増やすことによる煩わしさを恐れるのである>と。2.1) 一方<火に焼かれるよりも結婚した方がよい>、<あなたの靈魂を火に投げ込まないためである>（1コリント 7,9）と使徒は語っている。<夜となく昼となく我慢の生活をし、克己心から逸れるのではないかと恐れるためである>。<なぜなら我慢するために、靈魂が希望から分たれてしまうからである>。2) イシドロスは『倫理学』

⁶ 紀元後 145-160 年ごろに活動したグノーシス主義者。

⁷ 紀元後 120-145 年ごろに活動したグノーシス主義者。

の中で次のように述べている。<だから好戦的な女性には警戒せよ。神の恩寵から引き離されないためであり、火を灯して良心に照らし、祈りに専念せよ。3) あなたの感謝の念が懇願に墮し、それ以降正しい生を送らないでいたいと願うような場合には、躓くことのないように、結婚せよ。4) もしある若者がいて、彼が貧しくあるいは生活が下方に向かい、ロゴスに従って結婚することを望まぬような場合には、その人を兄弟から引き離してはならない。【自分は聖域に入ったのであり、わたしはまったく苦難を被ることができない】と言わせておけばよい。5) だがもし彼が疑いを抱き、こう述べたとしよう。【兄弟よ、わたしに手を貸しておくれ、わたしが罪を犯すことのないように】。それならば彼が、思惟面でも感覚面でも助けを得られるようにせよ。彼が麗しきものだけを手に入れ、手中にできるようにさせよ。3.1) 時にわれわれは口でこう言う。【われわれは罪を犯すことを望んでいないが、思念が罪を犯すことの上に漂うのだ】。そのような人間は、恐れゆえに、自らが望んでいることを行うことができない。懲罰が彼に臨むことにならないためである。2) しかるに人間性は、何らか必然的で自然本性的なものを含んでいるが、単に自然本性的なものをも有している。何か身にまとうものを有することは必然でもあり自然本性的なことでもある。しかるに性愛に関わる事柄は、自然本性的な事柄ではあるが、必然的なことではない>。

3) これらの言葉を引用したのは、正しい生き方をしていないバシレイデスの徒たちに対する論駁のためである。彼らは、保持する完徳性のゆえに、誤ちを犯す権能さえ有しているか、あるいはたとえ現在罪を犯そうとも本性的に完全に救われるという目的のために、本性的な「選ばれた特質」を持っている、と言う。これは誤りである。なぜなら教説の先駆者たちは、彼らと同じような行動をすることを認めてはいないからである。4) したがって、キリストの名を身に帯びながら、異邦人たちのなかで最も自制心のない者たちよりも制御されぬような生き方をし、名に対する誹謗を被ることのないようにせねばならない。<というのもこのような者たちは偽りの使徒であり、姦策の為し手なのであるから> (2 コリント 11,13)。<彼らの終末は、その業にしたがって下されるであろう> (同 11,15)。4,1) 実に、

克己とは、神との対話により、肉体に関わる事柄を軽んずることである。というのも性愛に関する事柄ばかりでなく、霊魂が、不可欠な事どもに満足することなく劣悪に欲するそれ以外の事どもに関しても、克己が関わってくるからである。3) 実に、言葉にも財の獲得にも、その用い方にも欲求にも、克己は関わるのである。しかして克己は、節制を行うことばかりでなく（それはわれわれに節制を教えるのであるが）、実際、力であり神的な恵みなのである。3) 現に存在する物事に関して、われわれに関わる事どもにとって、いったい何が良いと思われるか、それは語られねばならない。われわれは、神によってそれが恵まれた人々にあっては独身を寿ぐが、一回限りの結婚に関してはその崇高さに驚嘆し、ともに苦悩を耐え忍ばねばならないとして、〈互いに重荷を担い合え〉（ガラテヤ6,2）と言う。これは、うまく立っていると思われる人が、不意に〈倒れない〉ようにするためである（1コリント10,12）。再婚に関して、使徒は〈もし身が焦がれるのであれば〉、〈結婚しなさい〉と言っている（1コリント7,9）。

II. カルポクラテスおよびエピファネスによる結婚に関する見解。

5.1) さて、カルポクラテスおよびエピファネス⁸に与する人々は、妻を共有することをよしとしている。彼らから、キリストの名に対する最大の誹謗が流出している。2) このエピファネスという人物は、その著作も出回っている男で、カルポクラテスとその名をアレクサンドレイアという母（その父親はアレクサンドレウス、母親はケファッレーネウス）の間の子であるが、全生涯で17年間しか生きなかった。ケファッレーニアのサメーでは神として崇められている。そこでは、彼のために切り石で神殿が建てられ、祭壇、聖域、ムセイオンが建てられかつ聖別されている。そしてケファッレーニア人たちは新月の日毎にその聖堂に集い、誕生日にはエピファネスのためにその神化を寿ぐ。そしてお神酒を献げ、祝祭を開き、賛歌を歌うのである。3) 彼は、父親の許で普遍的教養教育（enkyklios paideia）とプ

⁸ いずれもグノーシス派に属す2世紀頃の人物。エピファネスはカルポクラテスの弟子。

ラトン哲学を身につけ、唯一論的 (monadikē) な知識に沿って教育され、ここからカルポクラテス的な異端が生まれたのである。6.1) 実に、この男は『正義について』という著作の中で、「神の正義とは、いわば平等性を伴った共同体である」と述べている。実に、どこであれ、等しくしつらえられた天が全地を球形に覆い尽くしている。また夜は、全星座を等しく示す。しかるに神は、昼の原因であり光の父である太陽を、上天から、地上にあって視ることのできる者どもすべてに降り注がせる。その人たちとは、すべて見ることのできる人々に共通してである。2) それは神が、富んでいる人と貧しい人、民衆と為政者、思慮なき者と思慮深い者、女性と男性、自由人と奴隷を区別なさないからである。そればかりでなく動物に関して、この点から漏れるものは何一つなく、すべての生物に等しく共通に太陽を、善きものにも悪しきものにも等しく降り注がせ、正義を確かなものとする。その際、何者もより多くを得ることができたりしないし、隣人の分を奪って自分の分を二倍にするために隣人から奪い取ったりすることもできないのである。3) 太陽はすべての生物に共通の滋養を提供するので、正義は万物にとって共通に等しく与えられ、かくして牛の種族は牛として同じような次第となり、豚の種は豚として、羊の種は羊として、それ以外の種もすべて同様である。4) というのも正義は、共通性として彼らのうちに現れ出でるからである。しかる後、共通性に従ってすべてが同様に、種ごとに蒔かれ、共通の滋養が大地に棲めるもの、すべての家畜そして万人に、等しく遣わされる。そのあり方は、いかなる法によって支配されるものでもなく、与える者・命ずる者の指示に適う仕方、すべてに現前するあり方による。7.1) しかるに、誕生に関わる事柄には記された法が存在しない(移し変えただけのものになろう)。等しく蒔き、産み、正義に基づく生来の共同体を保持するからである。創造者にして万物の父である方は、万物に対して平等に、見るための眼を等しく、自ら提供する正義に倣って定めている。その際、女性を男性と区別したり、理性を伴わないものを理性的動物と差別したりはしない。何らまったく差別を設けることなく、平等さと共通性をもって、見る能力を一つの指令でもって万物に同じように分かち与え恵んだのである。2) しかるに彼(エピファネス)は言う。<人

間の法は、無学を戒めることができず、法を破ることを教えた。なぜなら法の固有性は、神法による共同体を引き裂き、噛み砕く>と。だがこの際、彼は使徒の言葉を理解していない。使徒はこう述べている。<わたしは律法によって過ちを知った>。3) 彼によれば、律法によって<わたしのもの><あなたのもの>という理念が入り込んできたため、大地も富も、獲得されたものの共有のために用いられることがなく、結婚も共同体性を失った、という。4) <というのも神は、ブドウ畑を万人のために共通に作り、ブドウ畑はスズメも盗人も拒絶することはない。穀物に関して、その他の作物に関しても同様である。しかるに共同体が法的に侵されたため、平等性の原理が家畜や収穫物の盗人を生み出した。8.1) 実に神は、すべてを人間に共通に創造し、女性を男性に共通にめあわせ、同じようにすべての動物をつがわせて、正義を、平等性をもった共同性として明らかにされた。2) しかるにこうして生まれてきた人々は、このような交わりとしての共同性が彼らの起源であることを拒み、こう述べている。【すべての人間と交わられるとしても、一人の女性を娶って妻とせよ。それは他の動物が明らかにしていることだ】>。3) このようなことを述べつつ、彼は改めて、同様に次のような表現を用いて付言する。<というのも神は、力強く激しい情欲を、種の保持のため、男性のうちに盛り込んだ。これに関しては、法も倫理も他の事物のいかなるものも、消し去ることはできない。なぜならこれは神の教えなのだから>。4) このような人物は、われわれの論述のなかで、いかにすれば一撃のもとに論破できるのだろうか。彼はこのような言葉で律法をも福音をも台なしにしているのだから。律法はこう述べている。<姦淫してはならない>（出エジプト20,13）。一方福音はこう述べている。<すべてみだらな目で異性を見る者は、すでに姦淫を犯したのである>（マタイ5,28）。5) というのも<みだりに欲してはならない>（出エジプト20,17）と律法において語られている事柄が、律法・預言者・福音を通じて告げられている一なる神を指し示しているからである。神はこう語っている。<隣人の妻をみだらな目で見てはならない>。6) しかるにここでの「隣人」とは、ユダヤ人にとってのユダヤ人ではない。なぜなら彼らは、霊を同じくする兄弟なのだから。であるから可能性として残るのは、ここでの「隣

人」とは異邦人のことを述べているということである。すると、どうして霊における隣人と交わることができないというのだろうか。ヘブライ人のみならず、異邦人にとっても、その父はアブラハムなのだから。9.1) しかるに、もし姦通を犯した女や、彼女に対して姦通を働いた男が死に処せられるのであれば、＜隣人の妻にみだらな思いを抱いてはならない＞（レビ 20,10；申命 22,22）と述べている掟は、明らかに異邦人について語っているのである。それは誰かが律法に従って、隣人の妻からも姉妹からも遠ざかるとき、直ちに主の言葉を聴くようになるためである。＜わたしは言う、みだらな思いを抱いてはならない＞。しかるに＜わたしは＞の部分が付加されていることは、掟の影響力が持続的に働いていること、2) またカルポクラテスとエピファネスが神に挑んでいるということを明らかにしているのである。なぜならかの著名な著作、すなわち『正義について』の中で、およそ次のように彼は述べているからである。＜ここでは「法外な思いを抱いてはならない」と語っている律法者の言葉が、いかに笑止千万なものであるかを聞かねばならない。これは、さらに笑止千万なことには「隣人の持ち物に対して」に付加された言葉なのである。なぜなら、この情欲・みだらな思いを与えた方自身が、誕生に関わる事どもを維持してゆくものとして情欲を授け、またいかなる動物からも取り去っていないにも関わらず、これを遠ざけるように命じているからである。しかもこの際、「隣人の妻」という表現は、共同体の特質を不可避なものとしているわけであり、いっそう笑止千万なことを述べていることになる＞。

10.1) これらは、カルポクラテスの正統派が教説として定めている事柄である。一般に言われているところでは、彼らおよび同様の悪事を熱望する他の者どもは、宴のために（わたくしとしては、彼らの集会を「愛餐」と呼ぶつもりはないので）集合し、男女が一つところに群れて、満腹した後（「満腹してから愛の女神」【エリピテス、典拠不詳断片 895】というわけである）、彼らの肉欲上の「正義」を脇へ退けるべく、灯りを点じて恥ずべきほむらをともし、望むがままに、望む女性と交わる。彼らはこのような愛欲の宴のうちに“共同体”を実践しているのだとする。日中のうち、既に彼らは望みの女性たちに、「カルポクラテスの掟」（「神的な掟」と呼ぶこ

とは許されない)への従順を要求しているのである。思うにカルポクラテスは、このようなことを、犬や豚や山羊の好色に関する掟とすべきであった。2) わたくしには、彼はプラトンが『国家』篇の中で、女性はすべての男性にとって共有物であると述べていること(プラトン『国家』457D)を誤解しているのだと思われる。プラトンの真意は、女性は結婚以前には、その女性を望もうと考えている男性たちにとって共有で、それはちょうど、演劇がそれを観る人々にとって共通であると彼が言うのと同様であるが、一旦婚約してしまったならば、各々の女性はその男性のものであり、既婚女性はもはや共通の存在ではない、ということであろう。11.1) 一方クサントスは、『魔術師たち』と題された著作において、<魔術師【マゴス】たちは、母、娘、姉妹たちと交わることを合法的であり、また妻たちについても、暴力的あるいは密かにではなく、男性側が他の男性の妻を娶ることを望んだ場合、双方の合意があれば、共通の存在であると表明している>と述べている。2) このような、あるいはこれと同様の異端に関しては、わたくしが思うに、使徒ユダがその書簡の中で、預言者的に述べている。それは<同じようにこの夢想家たちも>(というのも彼らは、目覚めて真理に身を捧げてはいないのだから)から、<彼らの口は代言壮語する>(ユダ 8-16)までの箇所である。

III. 人間は苦難へと生まれたが故に結婚は避けるべきだとする説について。

12.1) さて、たとえすでにかのプラトン自身やピュタゴラス派が、後にマルキオン⁹派の異端が陥ったのと同様、誕生を悪であると理解していたとしても(プラトンは、妻たちを共通のものだと理解していたなどという説からは程遠い)、マルキオン派の人々は、それとは異なり、悪しき本性は悪しき質料と正しき創造者から生ずるとした。2) 実に、彼らは創造者によって成った世界を満たすことを望まず、結婚から遠ざかることを望み、自らの創造者と対立する。彼らは、呼び招く善き方に向かって急ごうとする

⁹ グノーシス主義者で、紀元後 85-160 年ごろ生きた。

ものの、その方は、それ以外の場で彼らが述べる「神」ではない。かくして彼らは、地上には何ら自らに固有のものを遺すことを望まない。彼らは、選択意志によって克己心ある者となるのではなく、創造者に対する敵意から、その方による被造物を用いることを望まないのである。3) けれども彼らは、神との不敬な戦いを挑んでいるのであって、自然本性的な理性から逸脱し、神の寛厚さと善性とを軽蔑している。彼らは、結婚することを望まないにしても、創造された食物を享受し、創造者による空気を吸っているのである。彼ら自身、創造者による作品なのであり、その被造物のうちに留まっているにもかかわらず、彼らの弁によれば、「自分たちはまったく新しい福音に与かっている」。彼らは、この「福音を告げられた」事柄に関しても、この世の主に対して恩義を認めねばならないはずなのであるが。

13.1) もっともこれらの者どもに対しては、諸原理についてのマルキオンの論述を扱う際に、詳細に論じることにはしたい¹⁰。しかるにわれわれが言及してきた哲学者たちは、マルキオン一派の者たちがその人々から、不敬にも創造が悪であると学んで、これがあたかも自らの教説であるかのように思い上がっているのであるが、彼ら哲学者たち自身は、創造が本性的に悪であるとは望んでおらず、むしろ真理を洞察する霊魂においてそう考えているだけなのである。2) というのも彼らは、霊魂は神的なものであるにもかかわらず、あたかも牢獄に引かれるかのように、この世に引きずり下ろされたとしているのである。したがって肉体をまとった霊魂としては、これをそれ自体として浄化してやるのが適切だとされる。3) この教説は、もはやマルキオン一派のものではなく、霊魂が肉体を、衣のようにまとい、輪廻転生するのだと唱える者たちに固有の説であって、彼らに対しては、霊魂について取り上げる際、また別に語るべき機会もあろう。

14.1) 一方ヘラクレイトスは、次のように述べているため、創造を悪としているように見える。〈生まれ出た者たちは生きようと欲するが、それは彼らが死の定めを得よう、否むしろ安らぎを得ようと欲するからであり、彼らは子供を、死の定めとすべく遺すのである〉(ヘラクレイトス断片 20, ティール

¹⁰ この内実あるいは著作については不詳である。

ス). 2) 一方エンペドクレスも、明らかにヘラクレイトスに同調し、こう述べている.

「われは泣き、われは嘆きぬ. 見慣れぬ土地を目にして」

(エンペドクレス断片 118 テイルス).

さらにはまた,

「なぜなら彼は、生ける者からその姿を変えて死者をつくったのだから」(同断片 125).

あるいはまた,

「おお何たること、おお死すべき者どもの恐るべき種たること、おお不幸なる族よ. 汝らはあたかも、いさかいと嘆きから生まれてきたかのようだ」(同断片 124).

3) 一方シビュッラもこう言っている.

「人間とは、死すべき肉的存在. 無に過ぎない」

(シビュッラの託宣, 断片 1,1).

次のように記す詩人にとっても、それは同様である.

「大地は、人間よりもか弱い種を育まない」

(ホメロス『オデュッセイア』 18.130).

15.1) 実にテオグニスもまた、誕生が悪であるということを次のような表現で語っている.

「地上に生ける種族(人間)にとって、何にもまして最上なのは生まれて来ないこと、そして鋭い太陽の光を目にしないこと. だが一旦生まれたなら、何としても速やかにハデスの門に赴くこと」

(テオグニス 425-427).

2) 彼らに同調する事柄を、悲劇作家エウリピデスも次のように記している.

「われわれは、集いをなして、生まれた者が、何たる悪の世界に来たったかを嘆くべきだ. 片や死せる者、すでに労苦を免れた者には、喜びの声で寿ぎつつ、館から送り出してやるべきだ」

(エウリピデス『クレソフォテス』断片 449).

3) あるいは同様のことを、次のように述べている.

「生きることは死ぬことなのか、死ぬことは生きることなのか、

ということを誰が知っているだろうか」

(エウリピデス『ホリュイトス』断片 638).

16.1) ヘロドトスもまた、これらと同じ事柄を、ソロンに次のように言わしめているように思われる。「おおクロイソスよ、すべて人間というものは災いなのだ」(ヘロドトス『歴史』1.32)。またソロンによるクレオビスとビトンの物語(ヘロドトス『歴史』1.31)も明らかに、誕生を責め、死を寿ぐことを意図するもの以外ではありえない。

2) 「さながら木の葉の生涯、それが人の定め」(ホメロス『イリアス』6.146)とホメロスは言っている。3) 一方プラトンは『クラテュロス』篇の中で、靈魂が肉体の中で責め苦を受けているという説をオルフェウスに帰し、次のように語っている。<ある人々は、肉体とはまさしく靈魂の墓場であり、さながら靈魂はこの世にあって埋葬されているかのようだ、と言っている。4) そして靈魂は、表現 (sēmainein) する事柄を肉体 (sōma) を通じて表すのであるから、それゆえ似つかわしくも肉体は「墓場」(sēma) と呼ばれるのである。とりわけオルフェウス一派の人々が、この名を用いたように思われる。それは、靈魂が何のために処罰を受けているかを説明するためである> (プラトン『クラテュロス』400BC)。17.1) フィロラオスの言葉もここで想起しておく価値があろう。ピュタゴラス派の彼は、次のように述べている。<いにしえの神学者や占い師たちも証言していることには、靈魂は、何らかの罰によって肉体に繋ぎ留められているのであり、それはあたかも墓場に置かれるかのよう、この肉体に葬られているとされる> (フィロラオス、断片 14 ティールス)。2) そればかりでなくピンダロスもまた、エレウシスにおける秘儀について語りつつ、次のように付言している。

「誰であれ、かの地下にある事柄が共通のものであるということを知れる者は幸い、彼は生涯の終わりを知り、ゼウスの与える端緒を知る」(ピンダロス、断片 137a シュレーガー)。

3) プラトンもまた、これに従い、『ファイドン』篇のなかで次のように記すことをためらわない。それは<かの浄化の儀式をわれわれに定めてくれた人々も>から<神々と共に住むだろう>までである(プラトン『ファイドン』69C)。4) では彼が次のように述べているのはどういうことだろうか。<

われわれが肉体を持ち、われわれの靈魂がこのような悪と混合されている限りは、われわれは自らが望むあのものを決して十分には獲得し得ないだろう> (『ファイトン』 66B). これは彼が、誕生とは諸々の最大の悪の原因であるということを仄めかしているのではないだろうか. 5) さらに彼は『ファイトン』篇の中で次のようにも証言している. <本当に哲学に携わっている限りの人々は、ただひたすらに死ぬこと、そして死んだ状態にあること、以外の何事をも実践していないのだが、このことにおそらく他の人々は気づいていないのだ> (『ファイトン』 64A). 18.1) あるいは次のような箇所も見られる. <ここでもまた、哲学者の靈魂は肉体を最高度に軽蔑し、肉体から逃れ、まったく自分自身だけになるように努めるのではないだろうか> (『ファイトン』 65CD). 2) これは、神的な使徒が次のように述べているのと同じく一致しているのではないだろうか. <わたしは惨めな人間である. 誰がわたしを、この「死の肉体」から救ってくれるのだろうか> (ローマ7,24). ここで使徒は、悪に引きずりおろされた事どもと同種であるという意味で、「死の肉体」と比喩的に語っているのに他なるまい. 3) また誕生の端緒としての共棲を、プラトンはマルキオン以前に『国家』篇の第1巻において覆しているように思われる. というのも、彼は老齡を称讃しつつ、次のように述べているからである.<あなたもよくご承知のように、わたしには、肉体をめぐる楽しみが少なくなってゆくにつれて、それだけ一層、談論の欲求と快樂とが増しているのだ> (プラトン『国家』 328D). 5) さらに彼は、性愛の享受について想起しつつ、こう述べる. <よしたまえ、君、わたしはそれから逃れ去ったことを、無上の悦びとしているのだ、たとえて見れば、凶暴で猛々しい一人の暴君の手から、やっと逃れおおせたようなものだ> (『国家』 329C). 19.1) あるいは『ファイトン』篇の中でも、彼は誕生を悪としてこう記している. <実際、これらの事柄について、秘教のなかで語られている説があるのだが、それによるとわれわれ人間は、何か牢獄のようなところにいるというのだ> (『ファイトン』 62B). さらにまた、こうも語られる. <際立って敬虔に生きたと判定された者たちについて言えば、この者たちこそが、あたかも牢獄から解放されるかのように、地下のこれらの場所から解放されて自由になり、上方の清々しい住まいに到達

して、真の大地の上に住むのである> (『ファイトン』 114BC). しかしながら、このようにその住まいは素晴らしいと感じられるにもかかわらず、こう語られる。<われわれは、この牢獄から自分を解放することも、逃げ出すこともしてはならないのだ> (『ファイトン』 62B). 4) かいつまんで言えば、プラトンはマルキオンに対して、質料を悪しきものであると考えるための端緒を提供してはいない。プラトンはこの世界に関して、敬虔にもこう述べているのである。<万物を作り為した方からは、美しきものが享受される。しかしそれ以前の状況から、天には醜いもの・不正なるものが生じるのであって、天はそのままにそれらを保持し、生物たちのうちにそれらを組み入れているのだ> (プラトン『政治家』 273BC). 20.1) さらに彼は、より明瞭にこう付言している。<これらのものが、こうして混合の際に球形になる理由は、以前あるときの本性的な親族だからであり、現在の世界の形態に至る前に、幾多の無秩序に与かったためである> (『政治家』 273B). 2) またこれに劣ることなく、彼は『法律』篇の中でも、人間の種族についてこう述べ、嘆いている。<神々は、人間という本性的に労多き種族を憐れみ、かわるがわる訪れる祝祭を、彼らのため、その労苦からの休息として定めた> (プラトン『法律』 653CD). 3) また『法律後編』(『エピノミス』)においても、この嘆きの理由について論じ、次のように述べている。<そもそも初めから、すべての生物にとって誕生するとは労苦に満ちた事柄である。まずは懐胎した状態に与かること、次いで誕生し、育ち、教育を受け、総じて幾多の労苦を経て成育するのだから。これはわれわれが皆語っていることである> (偽プラトン『法律後編』 973D). 21.1) これはどういうことなのだろうか。ヘラクレイトスもまた、ピュタゴラスや、『ゴルギアス』篇におけるソクラテスに倣うかたちで、誕生を悪であると呼んでいるではないか。それは次のようなくだりである。<死とは、われわれが目覚めているときに目にするものであり、それは眠っているときの眠りと同様である> (ヘラクレイトス,断片 21 ディールス).

2) だが以上で十分であろう。諸原理について取り上げる際に、哲学者たちが仄めかしあるいはマルキオンの一派が教説化している矛盾点をも検討することにしよう。わたくしとしては、マルキオンがプラトンから、恩知

らずにまた無学なかたちで、異質な教説の端緒を取り込んだのだということ、以上をもって十二分に明らかに示し終えられたと考えている。

22.1) ではわれわれは、克己に関する論に進むことにしよう。すでに述べたように、ギリシア人たちは子供の誕生に関わる幾多の煩わしさを疎んじ、多く困惑を語ってきた。だがそれを、マルキオン派の人々は不敬にも受け入れ、創造者に感謝を表さないのである。悲劇にはこう語られている。

「人間にとって、生まれるよりも生まれぬ方がより善きこと。生まれてからわたしは、子供たちを苦い苦痛とともに産む。産んだ後も、もし愚かな子供たちであったなら、あの苦痛は虚しきもの、悪しき子らを目にして、有能な子らを失ってしまったなら。だがもし子らが救われても、わたしは恐れゆえに、哀れな心を溶かす。こんなことに、何の有用さがあるか。呻くには、魂はひとつでは足りない。しかもこの地上で苦勞を抱えるとあつては」(エウリピデス、典拠不詳断片 908)。

あるいはまた同様に、

「わたしは、昔も今も、こう心に決めねばならない。子を産んでも、彼らが成人してから、どんな難儀の世界にわれわれが産み落とされたかを知らぬようにと」

(「ギリシア悲劇断片集」、作者不詳断片 111)。

4) またこの詩人は、せりふの中で、諸悪の原因を明瞭なかたちで根源に遡源させ、次のように語っている。

「おお、あなたは何と不幸な身に生まれ悪しき目に見舞われたことか、人間として誕生し、この世で生の不運を身に受けたとは、そこでは、万人にとって成長が始まり、大気が死すべき者どもに息吹を与えるというのに。死すべき身なのだから、死すべき事どものために苦悩することがなければよいのに」

(同上、作者不詳断片 112)。

23.1) あるいはまた、エウリピデスはこれらと同様のことを次のように表明している。

「死すべき者どもの誰一人として、幸いなる者も、幸せなる者も

いない。誰一人、労苦なく生まれ出た者はいないのだ」

(エウリピデス『アウリスのイフィゲネア』161-163)。

2) あるいはまた、

「ああ、ああ、人間の災いの、何たる定め、何たる姿であることか。誰もその限りを語らぬ」(エウリピデス『アンティホ』断片211)。

3) あるいは同様に、

「人間に関わる事柄に、終始幸せなことは、何一つないのだ」

(エウリピデス『救いを求める女たち』269以下)。

24.1) このような次第で、ピュタゴラス派の人々は性愛の営みを避けると言われている。ただわたくしには、彼らは子作りのために結婚し、子作りの後は、性愛の営みから来たる快楽を克服しようとしているように思われる。2) そのようなわけで、彼らはソラマメを摂取することを、神秘的な意味で禁じている。それは、マメの類が、誇腸や消化不良を引き起こすとか、錯乱した夢をもたらすとかいった理由のためではなく、また次に引く短詩のように、マメが人間の頭に似ているとされたりする理由のためではない。

「マメをかじるのは、両親の頭をかじるようなもの」

むしろその理由は、マメを食すると、女性が不妊症になるとされているためである。3) 実際テオフラストスは、『植物誌』の第5巻において、マメのさやが、新しく飢えられた樹木の根のあたりにまつわりつくとき、植えられた木を枯らせてしまうこと、そしてそこに巣を作る鳥が継続的にこれを食すると繁殖能力を失するということを報告している(テオフラストス『植物誌』5.15.1)。

IV. 異端者は放蕩を正当化するために様々な口実を用いること。

25.1) さて、異端から発した者どもの中で、ポントスの人マルキオンのことに言及した。彼は、創造者に対して対抗する意味で、世にある事物を用いることを拒絶する男である。2) 彼にとってこのような克己の理由となったのは一もしこれを克己と呼ぶべきであればの話だが一、創造者自身(こ

の方に対して、この神にも抗う巨人は自ら対抗していると考えている)、意に染まぬながらも、創造と形成に際して禁欲者であったのだ、という論理である。3) その際、この一派はフィリポに対して語られた主の言葉をも引用する。〈死者たちを埋葬することは、死者に任せよ。あなたはわたしに従え〉(マタイ8,22)。だがそうであれば、よく字句を検討してほしい。フィリポも、同様の肉の組成を有しているのであるが、汚れた死者の体を有しているわけではない。4) ではどうして、彼は肉の体を有しながら、死者の体を持ってはいないのだろうか。それは彼が、情動を死したものとし、キリストに生きる主という墓から蘇ったからである。5) われわれはまた、カルポクラテス派の不埒な女性たちとの交わりにも言及したが、ニコラオスの発言を論じる際、それは割愛した(『ストロマテイス』2.20.118.3 参照)。6) 彼によれば、この男は美しい妻を持っていたが、主の昇天以後、使徒たちによってその嫉妬心を叱責されたため、広場の中央に妻を引き出し、望む者と結婚させると申し出たという。7) というのも彼によれば、この行動は、〈肉は乱用せねばならない〉という一節から帰結したことである。もっとも彼の異端に与する人々は、この出来事と言葉に盲従し、単純にそしてよく吟味もしないまま、弁えもなく姦淫の行為に走るのである。26.1) だがわたたくしは、このニコラオスという男が、結婚していた妻の他にはいかなる女性とも交わらなかつたし、彼の子供たちのうち、娘たちは処女のままだり、息子も腐敗することなく留まったと聞いている。2) このような次第であるから、嫉妬された妻を使徒たちの中央にさらしたことが、情動からの脱却となり、熱求した快樂に対する克己が「肉を乱用する」ことである、と教えたのである。というのも思うに、彼は救い主の掟に従って、〈二人の主人に仕える〉(マタイ6,24)、すなわち快樂と神とに仕えることを望まなかつたのであろう。3) というのもかのマタイも、肉とは戦わねばならず、制されることもなく快樂に耽るべく肉を用いることが決してあつてはならず、むしろ靈魂を信仰と覚知とによって増し高めねばならない、と教えたと言われるからである¹¹。

¹¹ この一節は、そのままの形で、エウセビオス(『教会史』3.29.1-4)がクレメンスの記述として引用している箇所である。エウセビオスによると、ここに登場する

27.1) さて、俗悪な愛欲を「神秘的な共同体」などと呼ぶ連中があるが、彼らは呼び名の上でも倣岸に陥っているのである。なぜなら、何か悪事を行うことは「為す」と言われるが、ちょうど何か善きことを行う場合にも同様に「為す」と言われる。同じように「共同体」という表現も、銀や食物や衣服を分かち合う場合には善き意味で用いられるが、彼らは言わば、愛欲による交わりについても、不敬にも「共同体」という名で呼んでいるわけである。3) 実に、彼らのある者が、われらの見目麗しき娘に出会ったとき、＜「あなたを求める者すべてに与えよ」(ルカ 6,30) と記されている＞と声を掛けたところ、この娘は、この男の放埒さが理解できず、＜結婚のことなら母にお話してください＞とまったく真面目に答えたと言う。4) おお、何とも神をも恐れぬ不信心さよ。このような放埒さを共にする者ども、好色の兄弟どもは、主の言葉をも偽り、哲学のみならず、生全般をも蔑ろにするものである。彼らは真理を貶めるどころか、あらん限りの力でもって破壊し尽くそうとしているのだ。というのも彼らは三たび不幸せな者であり、肉欲的な、乱交の交わりを聖なるものであると称し、その交わりこそ、人々を神の王国に導き入れるものだと考えているのである。28.1) このような類の共同体は、容易に売春行為へと墮落するし、豚や山羊の類も彼らの仲間と化すであろう。さらには、彼らの許でより大いなる希望を抱いた女性たちは、館の前で公然と客引きをする身となって、望む男たちすべてを見さかいなく受け入れることになるだろう。2) <だがあなた方は、キリストをこのように学んだのではない。キリストについて聞き、キリストに結ばれて教えられ、真理がイエス・キリストのうちにあるとおりに学んだはずである。だから、以前のような生き方をして情欲に迷わされてはならず、滅びに向かっている古い人を脱ぎ捨てよ。3) 霊において心から新たにされ、正義と真理への敬虔さのうちに、神にかたどって創られた新しい人を身にまとうがよい> (エフェソ 4,20-24)。すなわちこれは、神的なものへの似姿において、という意味である。4) <かくしてあなた方は、愛された子供たちとして、神を模倣する者となり、愛のうちに歩むがよい。そ

ニコラオスは『使徒行録』(6,5) に登場するのと同人物であり、またニコラオス派とは『ヨハネの黙示録』(2,6) に登場する同名の一派であることになる。

の規範は、キリストがあなた方を愛し、自らをわれわれのため、神への芳香を放つ奉納物また生贄として捧げたことである。5) しかるに姦淫やすべての不浄なる事ども、食欲などは、あなた方のうちに見出されてはならない。聖なる者たちに相応しいように、恥ずべき事どもや愚かな言葉もあってはならない> (エフェソ 5,1-4)。6) 使徒は、言葉から浄められるよう心がけるべきことを教えて、次のように記している。それは<あなた方は知らねばならない。すべて姦通者は>以下の部分から、<むしろよく吟味せよ>までの部分である (エフェソ 5,5-11)。

29.1) さて彼らには、ある秘された人物に発する教説が流布していて、彼らの好色の母たるものとして、わたくしは以下に引く言辞を引用することにした。それは、彼ら自身がこの文書の著者であろうと (もし彼らが、非自制的に神をも欺いているのであれば、その狂気のさまを見よ)、あるいは他の人々に遭遇し、錯乱状態のうちに、この教説を美しきものと考えたのでであろうと、変わりはない。文面は次のようである。2) それは、<万物は一である。だがその一性は、ただそれにしか過ぎないということを良しとせず、まずその本体から息吹 (epipnoia) が発出し、一なる存在はその息吹と交わりをなし、「愛された存在」を形づくった。そこからさらに、ここに発する息吹が発出し、これと交わりをなして諸々の力を形づくった。これらは見られることも、聞かれることも不可能なものである>以下、<その各々を、固有の名称のもとに置いた>までである。3) もし彼らもまた、ウァレンティノス派の人々と同じように、霊的な交わりというものを設定したのだとすれば、おそらく彼らの誰かが、この考え方を受け容れたのであろう。だが肉的な倨傲による交わりを、聖なる預言にまで高めようとするのは、救いを諦めた者の説である。30.1) プロディオコスに発し、名を偽るかたちで、自分たちを「グノーシス派」であると標榜している者たちも、このような説を教説とし、自らを第一の神の本性的な子であると述べている。こうして彼らは、その生まれの良さと自由とを乱用しながら、望みのままに生活するのである。彼らは快樂を愛する生き方を欲し、何人にも治められることなく、いわば安息日の主として勝利を収め、あらゆる種の上に立つ本性を得て、王たる子らであるとする。彼らによれば、王であるの

は「書かれざる法」だと言う。2) かくして彼らは、まず自分たちが望む事柄をすべて行う。なぜなら彼らは、自らが望みまた試みようとも、多くの事柄に阻まれるであろうから、と言う。だが彼らが為す仕業といえ、それは王の為せる業ではなく、むしろごろつきの仕業である。彼らは捕らえられることを恐れ、露見することを拒み、処罰されることに怯えて密かに姦通を行っている。3) だが放埒や猥雑が、どうして自由だということがありえようか。使徒は言う、**<すべて罪を犯す者は奴隷である>** (ヨハネ 8,34)。

31.1) だがそればかりではなく、主が**<わたしは言う、欲情を抱いてはならない>** (マタイ 5,28) と命じている一方で、あらゆる欲情におのが身を委ねながら、どうして神に従った生活ができるのだろうか。2) また、人は自ら進んで罪を犯すことを欲し、姦通し快樂に身を委ね他者の結婚を穢すような教説を立てたりするだろうか、心にもなく罪を犯してしまう他者に対して、われわれは憐れみをかけるというのに。3) あるいはもし人が異邦の世界に至ったとしても、他者の所有物に対して誠実でなければ、真実を抱くことはないであろう。4) そしてある客人がその市民たちを侮辱し彼らに対して不正を犯すならば、居留者として必要不可欠なものをういたり、市民たちに迷惑をかけずに生活できたりはしないのではなかろうか。5) どうして、法によって定められた事柄を行わないという理由で異邦人たちからも憎まれる人々、すなわち不正にして自制心がなく、貪欲な姦通者たちと同じことを為す人々だけが、神を知っているなどと言うのだろうか。6) 彼らは他者の土地にあっても美しく生きることが不可欠であり、それは真に王的なるものを証しするためなのである。32.1) すでに人間的な立法者たちや神的な律法によっても、法に反した生き方を標榜した者たちは厭われている。実際、姦淫を犯した者を突き刺した者【ピネハス】は、主から祝福を受けたということが『民数記』に記されている (民数 25,8)。2) またヨハネは書簡の中でこう述べている。**<もしわれわれが彼と>**、すなわち神と**<交わりを有していると言いながら、闇のうちに歩んでいるとすれば、われわれは偽っており、真理を行ってはいない。だがもし、神が光のうちにいるように、われわれも光のうちに歩むなら、われわれは神と交わりを有し、その御子であるイエスの血がわれわれを罪から浄めてくれる>** (1ヨ

ハネ1,6以下). 33.1) ではどうして、このようなことをする人々が、世の事どもに立ち勝っていることになるだろうか. むしろ、世の人々の中でももっとも劣悪な者どもにさえ似ているのではないだろうか. 思うに彼らは、その本性においてのみならず、その行為においても似ている. 2) 彼ら世の人々に対し、その生まれの善さをもって凌駕することを良しとする人々は、その品性においても立ち勝ることが必須である. それは、牢獄に閉じ込められることを避けるためである. 3) 実に、主はこう仰せになる. <あなた方の義が、律法学者やファリサイ派の人々よりも勝っているのでなければ、あなた方は神の王国に入ることはできない> (マタイ 5,20). 4) 一方、食物に関する克己は『ダニエル書』において明らかにされている. また先を急いで言えば、従順についてはダビデが『詩篇』の中でこう語っている. <何において、若者は自らの道を正しくすべきであろうか> (詩篇 118,9 以下). 彼は直ちにこう耳にする. <まったき心をもって、あなたの言葉を守ることににおいてである>. 5) エレミヤもこう述べている. <主はこう仰せになる.「あなた方は異邦人の道に従って歩んではならない」> (エレミヤ 10,2).

34.1) 他のある者たちは、汚らわしく一文の値打ちもない者どもだが、この点に突き動かされ、人間は異種の力に形成されたと述べている. 彼らによれば、ヘソまではより神的な技術の産物であるが、そこから下はより低次の技術によるものであり、それゆえに人間は交合を激しく求めるのだという. 2) しかしながら彼らが見落としている点は、上半身もまた食物を希求し好色な思いを抱くということである. そして彼らは、ファリサイ人たちに向かってキリストが「同じ唯一なる神が、われわれの外側と内側の人間を形づくった」(ルカ 11,40) と語られたのに相反している. それだけでなく欲情は、身体を通じて起こるとしても、身体に属すものではないのである.

3) また別の者たち(われわれは彼らを「抗神派」(antitaktēs)と呼ぶのであるが)は、万物の父である神は、本性的にわれわれと等しく、神が創造したものはすべて善であると述べる.ただ神から成った者のある一人が、毒麦を播き、悪の本性を生んで、その悪でもってわれわれすべてを覆い包み、われわれを父と対立させた. 4) まさにこの故に、われわれもこの人間

に対峙して父への報復を目指し、第二者の意図に抗して行動するのだとする。したがって＜姦通してはならない＞（出エヰプト 20,13）と語ったのはこの彼なのであり、したがって彼らによれば、われわれは彼の命を打ち砕くために姦淫に努めよう、と彼らは言うのである。

35.1) そこでわれわれとしてはこの者たちに対し、こう述べることにしよう。「偽預言者たちや、真理を欺く者たちは、その業から知られるのだ」ということをわれわれは認めている、と。あなた方の業は非難されている。ではどうして、あなた方はなお真理に抗おうとはやるのか。2) 何も悪しきものは存在しないし、あなた方が、神に反するとして論難している人物は、まったく非難するに当たらない（実りとともに、樹木も同時に切り倒されるのだから）。あるいはもし、何か悪が存在するのであれば、われわれに語って欲しい。正義、克己、辛抱、忍耐、あるいはなぜ、これらと同様の事どもに関して与えられた掟が、良きものであるか悪しきものであるか、などと彼らが論じているのであろうか。3) もし律法が、それを行うことを禁じているような恥すべき事どものほとんどが、悪しき事柄であるのなら、悪は自分自身を崩壊させるために、自ら立法していることになるが、これはありえないことである。だがもし善き事柄であるのなら、善き律法群に対して抗う者どもは、善に対して抗い、悪を為すことに同意しているわけである。36.1) 既に、その方だけは信ずるに値する救い主も自ら、憎んだり、罵ったりすることを禁じ、＜あなたを訴える人と道を行く場合、彼の友となって和解するように試みよ＞（マタイ 5,25）と述べている。2) 彼らはあるいは、キリストの勧告をも否定して、対立する人と対立したままであろうとするのか、あるいはこの人と友になり、対立をやめるのであろうか。3) ではどういうことなのだろうか。おお貴い身分の方々よ（わたしはこの場にいる人たちに語りかけるかのような口調で述べたい）、あなた方は知らないのか、麗しくでき上がった掟に異を唱えることは、自ら自身の救いに反発することだということ。なぜならあなた方は、有用な形で命じられた事柄をではなく、あなた方自身を覆しているのだから。4) また主は＜あなた方の善き業を輝かせよ＞（マタイ 5,16）と語るが、あなた方は自らの好色を明らかにしているのだ。5) なかんずく、もしあなた方が立法者の掟を破

壊しようと思んでいるのであれば、なぜ、＜姦淫してはならない＞（出エジプト 20,13）、また＜少年を虐待してはならない＞（クレムス『ギリシア人への勧告』108.5 および『訓導者』2.89.1；3.89.1）あるいは克己の関連で併せ提示されている事柄を、自らの非自制によって打ち壊そうと試みるのか。あなた方は、まだ冬の真っ盛りという頃に、夏を来たらせる目的で、主によってもたらされた冬を滅ぼすということはできない。また大地に対し、船を浮かべよう場にしようとか、海に対して歩きよう場にしようとかすることは不可能である。それはまるで、異邦人のクセルクセスがやろうとしたこととして歴史記述者たちが述べているのと、まったく同じありさまではないか（ヘロドトス『歴史』7.54）。37.1）ではなぜ、あなた方は掟のすべてに対して、抗おうとしないのだろうか。神はこう述べる。＜産めよ、増えよ＞（創世 1,28）。あなた方は律法に抗うのなら、共棲をまったくしてはならないはずではないか。また神は＜わたしはあなた方に、食糧として享受できるように、すべてのものを与えた＞（創世 1,29）と述べるが、あなた方は何も享受してはならないであろう。2）だがそればかりではなく＜目には目を＞（出エジプト 21,24）と立法者は述べているのだから、あなた方は対立している事柄に対し対立物をもって報いてはならないはずではないか。あるいは立法者は、盗人に対し、4倍にして返却せよと命じているが（出エジプト 21,37）、あなた方は盗人にさらに与えねばならないはずである。3）さらには同様に、＜主を愛せ＞（申命 6,5）という掟に反発するのであれば、万物の神を愛してはならないはずであろう。あるいはまた、＜彫ったり鋳たりしたものを造ってはならない＞（申命 27,15）と立法者が述べているのだから、あなた方は彫った像に屈拝せねばならないという論理に陥るであろう。4）であるからどうして、あなた方は自分で言うように掟に反発しながら、創造者に対して不敬虔に陥らず、姦淫や姦通に似た事どもを熱心に追求することができるのだろうか。あるいはまた、自分たちが「非力だ」と考えている存在を、より大いなる存在と見なして恥じることがないのか。その方は、もし望むならば、その通りに成る方なのだ。むしろその業とは、その方が善き方として望んだ事柄ではないのか。あなた方が呼ぶところの「父」は、逆にあなた方自身によって、非力であること

が証明されているのだから。

38.1) さてこれらの者どもも、預言的な聖書箇所から類推を行い、字句をつまみ食いして下手なパッチワークを行い、寓意的に語られた箇所を字句どおりに理解している。彼らによれば、こう記されている。2) <彼らは神に抗いながらも救われている> (マラキ 3,15)。さらにある者は<恥知らずな神に>を付加し、この聖句を、公にされた聖書の意向として受容し、創造者に抗うことこそ自分たちにとっての救いを意味すると理解している。3) だが<恥知らずな神に>とは記されていない。もしそう記されていたとすれば、おお、無思慮な者どもよ、あなた方はいわば、ここで「悪魔」と呼ばれている恥知らずな者の声を聞き届けたのである。それは、あるいはその人を中傷するものか、もしくは罪人たちを論駁するものか、もしくは背教者として叱責するものか、そのいずれかであろう。4) 実に、この箇所で語られている民は、彼らが重い罪を犯した事柄について矯正を受け、それに耐えながらも呻吟しつつ、当該の語句を漏らしたのである、「他の民族は法を犯しながらも咎めを受けず、彼らだけが事毎に卑しめられているのはなぜか」と。それはエレミヤが<何故不敬虔な者どもの道は栄えるのか> (エレミヤ 12,1) とつぶやいたのと同様である。上に挙げた『マラキ書』からの一節、<彼らは神に抗いながらも救われている>は、この『エレミヤ書』の箇所と同様である。5) つまり預言者たちは預言を告げる際に、神からある事柄を聞いたと語るだけでなく、彼ら自身も、民の側からのつぶやきを応答として告げるかたちで表明する。それは言わば、人間の側からの要請を伝えるかたちで行われるのであり、上掲の一節もちょうどそれに該当するのである。39.1) 彼らに沿うかたちで、使徒パウロも『ローマ人たちへの書簡』の中で敷衍的に記しているではないか。<われわれのことを、「善が生起するために、悪を行おうではないか」と言っている」と言っ
て中傷する人々があるが、そうではない。その批判は当たらない> (ローマ 3,8)。2) このような者どもは、読書の際に、聖書の意味を、自分たちの快樂に有利な方へと読み方の調子で捻じ曲げる。朗読のための符号や記号などを変改し、賢慮をもってまた為になるように告げられている事柄を、強いて自分たちの奢侈の方へと引きつける人々である。3) マラキは述べている。<

あなた方は、自分の語る言葉によって神を疲弊させている。それなのにあなた方は言う。「どのように疲弊させたのか」と。「悪を行う者はすべて、主の前に善しとされる」とか、「主は彼らを喜ばれる」とか、「正義の神はどこにおられるのか」などと言うことによってである> (マキ2,17)。

V. 異端に二種あること。放蕩と禁欲。

40.1) さてわれわれは、さらに多くの部分を割いて爪を切り過ぎ、もっと多くの不埒な異端諸派に言及することのないように、また彼らの各々について論ずることを余儀なくされ、その各々に対して恥ずかしい思いをし、長々しく言及するはめにならないように、ここで二つの系統に彼ら異端のすべてを分割し、彼らに回答することにしよう。2) すなわちその一方は、節度なく生きることを教えるものであり、もう一方は、適切さを逸し、不敬と闘争心をもって克己を歌い上げ説く類のものである。3) まずは第一の分派について取り上げねばならない。もしすべての生き方を選択することができるのであれば、克己を伴った生を選ぶことは明らかである。そして選ばれた者にとって、すべての生が危険を伴わないものであるとすれば、彼は徳と賢慮を伴っているのであるからなおのこと危険を伴わないことは明らかである。4) なぜなら彼は<安息日の主> (マイ12,8) でもあるのだから、彼には放埒な生き方をさえする権能が与えられており、しかもその際、罪に問われることはない。品位をもって生活する者にとってはなおさらのことであり、彼が処罰に服すことはない。5) なぜなら、使徒もこう述べている。<すべての事柄が許されているが、すべてが益になるわけではない> (1 コリント 6,12 ; 10,23)。しかるに、すべてが許されているのであるなら、賢慮を働かせることもできるということは明らかである。41.1) したがってちょうど、徳に従って生きようと、おのが能力を用いる者が称讃されるように、自由で卓越した能力をわれわれに付与し、われわれが欲するままに生きることを許し、われわれの選択や回避が否応なく奴隷的にならないようにさせた方は、それよりもはるかに崇高であり敬服さるべきである。2) だが、非自制性と克己を選択した者の各々が恐れを抱かないとし

ても、その崇高さは同様ではない。前者は快樂に溺れて肉体を甘やかす一方、後者は賢慮をもって、肉体を司る靈魂を情動から解放するからである。

3) もし彼らが、われわれは<自由を得るために召し出されたのだ> (ガラテヤ5,13) と言うとしても、われわれは、使徒の言を借りるなら<自由を肉へのいざないとして>提供することは決してすまい。4) 一方もし欲情に敬意を払い、恥すべき生を善悪無記 (adiaphoros) だと考えるべきであるなら—これは彼らの言い分であるが—、すべてにおいて欲情に従うべきであろうし、もしそうだとするならば、われわれを説得する人々に従って、最も放埒にして最も不敬なることをすべて実行すべきだということになるだろう。5) あるいはわれわれが、欲情のうちの何らかは遠ざけ、もはや善悪無記の生き方をせず、われわれの最も高貴さに欠けた部分 (腹部と恥部) にはでたらめに隷従すべきでないとしよう (欲情を通じて自らの肢体を死体として弄ぶことになるのだから)。6) 欲情は、享受のために奉仕の務めを果たすとき、育成され活力を増す。それはちょうど、卑しめておくと鈍るのと同様である。42.1) どうして、肉体の快樂に圧倒されていながら主に似る者とされたり、神の覚知を獲得したりすることが可能であろうか。すべての快樂の始まりをなすのは欲情であるが、欲情は何かが不足すると、ある種の苦痛となり、また希求に向かう思いとなる。2) 従ってわたくしには、このようなあり方を受け容れる者たちは、次のように言われている者に他ならないように思われる。

「恥をかく上に痛い目にも遭う」(ヘシオドス『農と暦』211)。

彼らは、自らの上に「自業自得の」(ホメロス『オデュッセイア』18.73) 悪事を、今も後代までも選び取ることになるのである。3) であるからもし、すべてが可能であり、悪しき行為によって希望を逸する恐れがまったくないのであれば、おそらく彼らには、悪しく憐れむべき生き方をすることへの口実が見出されるのであろう。4) だがわれわれにとっての至福なる生というのは、掟によって示されており、そこに語られたことに対しては一切背くことなく、また勧告されている事柄に対しても、それがたとえ最も些細なことであってもなお、貶めることなく、御言葉に従って来るべきだと考えていることであれば、皆が心して守らねばならないのである。もしわれわれ

がそこから躓くなら、＜尽きることのない悪＞（ホメロス『オデュッセイア』12,118）に陥ることは必定である。5) そして、信じる者たちがそれを通じて導かれる神的な書に従い、力の限り主に似る者とされよう。善悪無記に生きるのではなく、できうる限り快樂と欲情から浄められ、靈魂に配慮しよう。靈魂においてただ神的な事柄に専心すべきなのである。6) というのも理性は、浄らかなるものであり、あらゆる悪から解放されて、いわば神的な力を受け取ることが可能な、そのうちに神の似像の蘇るものなのだから。使徒は言う。＜主のうちにこのような希望を置く者は、ちょうど主その方が清い方であるように、皆、自らを清いものとする＞（1ヨハネ3,3）。43.1) しかるに、神に関する覚知を得ることは、いまだなお情動に駆られている者どもには不可能である。さらには神に関する覚知をまったく獲得していない者どもに、希望に与かることはまったく不可能である。そしてこの目標に到達していない者に対して、神に関する無知は叱責を行うと思われる一方、神について無知であることをもたらすのは、生活のありようである。2) というのも神に関して知悉していながら、肉体に媚びへつらうことを恥じないということはまったくもって不可能だからである。快樂が善であるということと、美にして善であるものは唯一であること、あるいは主のみが美であること、また神のみが善き方であり唯一愛されるべき方であることを、同時に謳い上げるのはまったく不可能である。3) ＜あなた方はキリストのうちに、肉の体を脱ぎ捨てることにおいて、キリストの割礼において、手によることのない割礼を受けたのである＞（コロサイ 2,11）。4) ＜だから、あなた方はキリストと共に目覚めたのであるなら、地上的な事どもではなく、天上的なるものを求め、天上的なるものを考えよ。なぜならあなた方は死せる者とされたのであり、あなた方の生命は神のうちに、キリストと共に隠されているのであるから＞（コロサイ 3,1-3）。彼らが精進する事柄とは、姦淫ではありえない。5) ＜あなた方は、地上における四肢を死せるものとせよ。それはすなわち、姦淫、不浄、情動、欲望、そのゆえに神の怒りが下される事どもである＞（コロサイ 3,5 以下）。だからあなた方は進んで＜怒り、憤激、悪事、誹謗、その口から出る恥ずべき言動＞（コロサイ 3,8-10）を棄て去るがよい。＜古い人を脱ぎ去るのだ、欲望と共に。そして新たに

された新しい人を身にまとい、あなたを創造した方の像として、認識をめざすのだ>. 44.1) 生活のありように関わる事どもは、掟を知れる者たちを明らかなかたちで吟味する。言葉のあり方に従って、生活が築かれるからである。樹木が知られるのは実りからであって、花や葉からではない。2) したがって覚知は、実りと生活のあり方から来たるのであり、言葉や花から到来するのではない。3) なぜならわれわれは、覚知とは単なる言葉に過ぎないとは言わず、何らかの神的な知であり、掟に従った従順によって靈魂のうちに生ずる光であると言うからである。この光とは、誕生の際にあった事どもすべてを明らかにし、彼自らが人間としての自分を認識できるように備え、神に適わしき者とされることを教える。身体における眼、それは理性にあっては覚知である。4) 快樂への隷属を自由と言うことなかれ。怒りを甘美であると言うべきでないのと同様である。われわれは、自由というものをすでに学んでいる。それは、主ただ一人がわれわれを自由にされたからであり、われわれを諸々の快樂、欲望、その他の情動から解放されたからである。5) <「わたしは神を知っている」と言いながら、神の掟を守らない者は偽り者であり、その人のうちに真理は存在しない> (1ヨハネ 2,4) とヨハネは述べている。

VI. 福音の不敬な理解から節制を実行する異端者について。

45.1) さて、体裁よく克己を唱え、創造、および全能者である唯一なる神にして聖なる創造者に対して不敬を働き、結婚と子作りは受容すべきでなく、将来不幸に陥る者たちをさらに世に加えたり、死に滋養を供給したりすべきではないと教える者たちには、次のことを述べねばならない。まず第一に、使徒ヨハネの言葉である。2) <今や多くの反キリストが着ている。ここから、われわれは終わりのときが来ていることを知る。彼らはわれわれから去っていったが、そもそもわれわれの仲間ではない。もしわれわれの仲間であったなら、われわれの許に留まっていたであろう> (1ヨハネ 2,18 以下)。3) しかる後、使徒たちによって奉じられている説を解体させる者どもは覆さねばならない。それは次のような次第である。サロメは主

に「いったいいつまで死が力を振るうのでしょうか」と尋ねた。これは生が悪であり創造が悪しきものであるという意味においてではない。これに対して主は、「あなた方婦人たちが子を産む限り」と答えたというが、これは単に、自然本性的な経緯を教えたに過ぎない。なぜならどのような場合であっても、誕生には腐敗が後から伴うからである。46.1) 奢侈やあらゆる種類の不道徳からわれわれを解放することを律法は望んでいるが、この律法の最終目的とは、われわれを不法から正義へと導き、われわれが節度ある結婚そして子作りまた生活様式を選び取ることなのである。2) しかるに主は<律法を廃止するためにやって来たのではなく、むしろ完成させるために来た> (マタイ5,17)。しかるに「完成させる」とは、それまで欠けていたからというわけではなく、主自らの顕現によって、律法に基づく預言が完全なものとなるという仕方によったのである。なぜなら、正しき生き方に関わる事どもというのは、正しき生き方をしてきた人々には、律法以前にも言葉によって告げ知らされていたからである。3) したがって多くの人々は、克己を知らないままに身体的な生き方をしていたのであって、それは霊的な生き方ではなかった。霊の伴わない身体は、土と塵である。4) 主は情欲による姦通を裁き切る。それは何故であろうか。それは姦通が、克己を伴って結婚を生き抜くことが不可能だからであり、<神が繋ぎ合わせたもの> (マタイ 19,6) を解くべく試みないわけにはゆかないからではないだろうか。共なる絆の解体者たちは、このような説を教えているが、彼らによって、「共なる絆」(syzygia) という名詞そのものが誹謗されているのである。5) 彼らは、交合が汚らわしいものだと言うが、その彼ら自身が、その組成を、交合から獲得したのであるから、どうして彼ら自身が汚らわしいということにならないであろうか。聖とされた者たちに関しては、その種すらも聖であるとわたくしは考える。47.1) われわれとしては、霊ばかりでなく、習性と生き方、そして肉体までも、聖化されねばならない。使徒パウロは、いかなる言葉でもって、妻は夫によって聖化され、夫は妻によって聖化されると述べているだろうか。2) 離婚をめぐる、モーセが認めているのであれば妻を離縁してよいのか、と尋ねた者たちに対して主が答えた事柄は、いったいどんなものだったであろうか。主はこう言われた。

＜あなた方の心が頑なであるから、モーセはそう記したのだ。最初に創られた人間に対して、神が何と言われたか、あなた方は読んだことがないのか。＜あなた方二人は、一つとなる＞とあるではないか。であるから、不貞以外の理由で妻を離縁する者は、姦通を犯すことになる＞。3) だが主はこうも言われた。＜復活の後には、娶ることも嫁ぐこともない＞(マタイ 22,30)。というのも、腹と食物について、こう語られている。＜食物は腹のため、腹は食物のためにある。だが神は、これらのどちらをもなきものとされる＞(1 コリント 6,13)。これは、猪やヤギのごとくに生きることを考えている者たちを叱責する言葉であり、彼らが恥知らずなあり方で食べたり交わったりすることをたしなめるためのものである。48.1) というのももし彼らが、自ら言っているように、復活をすでに享けているのであれば、そしてそれゆえに結婚を意味なきものとしているのであれば、彼らは食べも飲みもしないはずである。なぜなら使徒が、復活にあっては腹も食物も意味なきものとなると言っているのであるから。2) したがって、どうして彼らが飢えたり、渇いたり、肉体に関する事どもで苦悩したりするのであろうか、あるいはキリストにより、予期される完全な復活を通じて享ける他の事どもを彼らが信じていないのであろうか。そればかりでなく彼らは、偶像を信じつつ、食物や結婚関係を忌避しているのである。3) ＜神の国には食べることも飲むこともない＞(ローマ 14,17) と使徒は言っている。言うまでもなく彼らの念頭にあるのは、酒や生物(の摂取)、そして結婚関係を忌避しながら、天使と鬼神たちに仕えている魔術師たちのことである。しかるに謙遜とは柔和さのことであって、身体に対する虐待ではないのと同じように、霊魂に対する克己とは、人前で行われるのではなく、隠れた場所で行われる徳のことなのである。

49.1) 結婚とは姦淫に他ならないと主張し、結婚とは悪魔によって伝えられたものだという教説を立てる者どもがいる。この大言壮語する者どもは＜自分たちは、結婚もせず地上にあって何物をも所有しなかった主に倣っているのだ＞と言い、＜他の誰よりも福音を理解しているのだ＞と豪語している。2) だが彼らに対して、聖書はこう記している。＜神は高慢な者どもを敵とし、遜る人々に恩寵を与える＞(ヤコブ 4,6)。3) しかも彼らは

主が結婚しなかった理由を知らないでいるのだ。これはまず、主が自らの花嫁、教会を持っていたことによる。次に、主は通常の間人ではなく、肉に關しての助け手を必要とされなかつたためである。また、永遠に留まり神の独り子である主にあつては子供を儲ける必要がなかつたためである。

4) この主自らがこう述べている。＜神が絆で繋いだものを、人が切り離してはならない＞（マタイ 19,6）。またこうも記されている。＜ノアの時代にそうであつたように、人々は娶つたり嫁いだりし、ロトの時代にそうであつたように、人々は建てたり植えたりしていた。人の子が現れるときもそれと同じようになるだろう＞（ルカ 17,26-30）。5) また、これを主が異邦人に向けて述べているのでないことには、主がこう付け加えている。＜人の子が再び現れるとき、ここまでの信仰を地上に見出すであろうか？＞（ルカ 18,8）。6) さらにこう述べられている。＜そのとき、胎に子を宿した女性たち、乳飲み子を抱える母たちは不幸である＞（マタイ 24,19）。だがこれらも比喩的に語られている。それゆゑ主は、＜父が固有の権限において定めた＞（使徒 1,7）その時を明確にすることがなかつた。これは世が幾世代にもわたつて継続するためである。50.1) しかるに＜すべての人々がこの言葉を受け容れられるわけではない。そのように生まれついている独身者もあれば、人によって独身にされた独身者もあり、また天の王国のために自らを進んで独身にした独身者もあるからだ。受け容れられる者は受け容れよ＞（マタイ 19,11 以下）。2) 離婚に關する議論の後で、ある者たちは＜もし、妻を持つことの責めがこれほどまでに大きいのであれば、人間にとって結婚することは有益ではないのではないか＞と尋ねたが、このとき主は＜この事柄を受け入れられるのは、すべての者たちではなく、許された者たちだけである＞と答えた（マタイ 19,12）。3) というのも、この事柄について尋ねた者たちは、姦通の罪で断罪された妻を出した場合、他の女を娶つてよいかどうかを問おうと望んでいたからである。

4) さて、少なからぬ数の陸上競技者たちも、肉体的な鍛錬のために克己に励み、性愛の類を遠ざけておくと言われている。それはたとえば、クロトンの人アステュロスやヒメラの人クリソンがそうである。キトラ奏者のアモイベウスもまた、新婚であるのに新妻を遠ざけた。キュレネの人アリ

ストテレスも、愛人ライスをひとり蔑んでいた。51.1) つまり彼はヘタイラに、もし競争相手たちに対し、何事かを自分のために為してくれるのなら、彼女を祖国に連れてゆこう、と約束しておきながら、それを成し遂げてしまうと、立てた誓いを喜んで果たすべく、彼女にこの上なく似通った似像を描き、キュレネに立てた。これはイストロスが『競技の特質について』で述べていることである。したがって、宦官的なことは、もし神に向かう愛ゆえになされるのでなければ、有徳の事柄とは言えない。

2) すでに幸いなる使徒パウロが、結婚を厭う人々についてこう記している。〈終わりのときには、惑わす霊と、悪霊どもの教えとに心を奪われ、信仰から脱落する者たちがいる。彼らは結婚を禁じたり、食物を断つことを命じたりする〉(1テモテ 4,1 ; 4,3)。3) またこうも述べている。〈あなた方のうちの誰も、偽りの謙遜と体の苦行にふける者たちから、不利な判断を下されてはならない〉(コサイ 2,18 ; 2,23)。彼は次のようなことも記している。〈妻と結ばれているなら、そのつながりを解こうとしてはならない。妻と結ばれていないなら、妻を求めてはならない〉(1コリント 7,27)。あるいはまた〈悪魔があなた方を試みることのないように、あなた方めいめいが自分の妻を持ちなさい〉(1コリント 7,2;7,5)とも述べている。52.1) これは一体、どういうことなのだろうか。いにしへの義しき人々は、感謝をもって創造に与らなかつたというのだろうか。彼らはしかも、結婚し、克己のうちに子を儲けたのである。エリヤには、カラスがパンと肉を食糧として運んできた(列王上 17,6)。また預言者のサムエルは、食べる分を取り分けておいた腿肉を持ち出し、サウルに食べるようにと与えた(サムエル上 9,24)。2) しかるに彼らは、自分たちはこれらの預言者たちよりも生活様式と生き方において優っていると豪語するにもかかわらず、これらの預言者たちの行動と比較されるには耐え得ないであろう。3) 〈食べない人は、食べる人を軽蔑してはならないし、食べる人は、食べる人を裁いてはならない。神はこのような人をも受け入れられたのだから〉(ローマ 14,3)。4) だがそればかりでなく、主も自らに関してこう述べている。〈洗礼者ヨハネがやって来て、食べも飲みもしないでいると、人々は言った。「あれは悪霊に取りつかれているのだ」。人の子が来て食べたり飲んだりすると、人々

は言う。「見ろ、あれは大食漢で大酒飲みだ。徴税人の友達で罪びとだ」> (マタイ 11,18 以下). 5) いったい、彼らは使徒たちをも裁けるといふのだろうか。ペトロとフィリポには子供がいたし、フィリポは娘たちを男たちに嫁入りさせた (エウセビオス『教会史』 3.30.1). 53.1) またパウロはある書簡の中で、自らの「協働者」(syzygos) について言及することをためらわない (フィリピ 4,3). 使徒は、宣教奉仕の際に身軽でいられるよう、彼女を伴わなかったのである¹²。彼はある書簡の中でこう語っている。<われわれには、他の使徒たちと同じように、姉妹である妻を同伴する権利を持たないのだろうか> (1 コリント 9,5). 3) だがこれらの使徒たちは、奉仕の務めにふさわしい形で、宣教の業に気を散らすことなく専念できるように、妻としてではなく、妻を姉妹として同伴し、彼女たちは、副助祭たるべき存在として、家庭を守る女性たちと共にあったのである。これらの事柄を通じ、女性たちへの接し方にも、非難される余地のないあり方で主の教えが浸透している。4) というのもわれわれは、女性助祭たちに関して、真正なる使徒パウロが、テモテに宛てた別の書簡の中でこう定めているのを知っているからである (1 テモテ 5,9 以下)。実にこの使徒は<神の王国とは、食べ物や飲み物ではなく> (ローマ 14,17)、逆に禁酒や肉断ちの問題でもなく、<むしろ正義と平和、そして聖霊のうちなる喜びなのである>と叫んでいる。5) 彼らのうちの誰が、エリヤのように毛衣をまとい、革帯を締めて歩き廻っているだろうか (列王上 19,13 ; 19,19 ; 列王下 1,8)。誰がイザヤのように粗布をまとい、それ以外は裸形で、履物も履かないことがあるだろうか (イザヤ 20,2)。あるいはエレミヤのように、麻の帯だけを締めているような人があろうか (エレミヤ 13,1)。誰がヨハネの、人生の覚知のためのような出で立ちを模倣するであろうか (マタイ 3,4)。だがそればかりでなく、至福なる預言者たちは、このような生活をするので、創造者に対して感謝を捧げていたのである。

¹² この一節およびこれに続く一節は、そのままの形で、エウセビオス (『教会史』 3.30.1) がクレメンスの記述として引用している箇所である。ただパウロが妻帯していたとする伝承は一部の説に過ぎず、参照箇所として引いた『フィリピ書』や『第 1 コリント書』についても、本文のものとは別の解釈が可能である。

54.1) しかるにカルポクラテス、および彼と同じように節度のない「共同体」に出入りする者どもの言う「正義」は、かくして崩壊する。というのも、彼は「あなたを求める者に与えよ」と言うとともに、こうも付言するからである。「饗応されることを望む者を追い返してはならない」。ただこれは、共同体の交わりを教えるものであって、好色を教えるものではない。2) どうして、求める者や与かる者が、持てる者、与える者、饗応する者がまったくいないのに、彼らから饗応され得るだろうか。3) また、主が次のように語ったのは何故だったのであろうか。＜わたしが飢えていたとき、あなた方は食べさせてくれた。わたしが渴いていたとき、あなた方は飲ませてくれた。わたしが客人であったとき、あなた方は泊めてくれた。わたしが裸であったとき、あなたがたは衣をまとわせてくれた＞（マタイ 25, 35 以下）。その後、主はこう付言する。＜これらの最も小さき人々の一人に対してあなたがたが行ったことは、わたしにしてくれたことなのである＞。4) これと同じ事柄は、旧約の中でも律法として提示されていないだろうか。『箴言』には、＜貧しき者に与える者は、神を饗応するのである＞（箴言 19,17）、また＜事欠く者に良くすることに躊躇してはならない＞（箴言 3,27）と語られる。55.1) あるいはまた、＜憐れみと信仰とがあなたを離れないようにせよ＞（箴言 3,3）と述べられる。しかるに＜貧困は人間を謙遜な者とする。勤勉な人の手は富ませる＞（箴言 10,4）。またこう続けられる。＜見よ、かの人を。彼は自らの持ち金を利子をつけて貸さない。その金は嘉せられる＞（詩篇 14,5）。また＜自らの富は、人の靈魂の購い金と判断される＞（箴言 13,8）とは、なんとも直接に本質を明らかにする句ではないだろうか。ちょうどこの世界が、暑さ、乾き、そして湿度という、相対立するものから成り立っているように、世は与える者と受け取る者から成り立っているのである。2) さらにこう語られる。＜あなたはもし完全な人になりたいのであれば、財産を売り払い、貧しい人々に与えよ＞（マタイ 19,21）。これは、＜わたしはすべての掟を若い頃から守ってきました＞（マタイ 19,20）と思い上がる者を駁す句である。なぜならその男は、＜あなたの隣人をあなた自身のように愛せ＞（マタイ 19,19）との掟を満たしていないからである。彼はこのとき主により、愛をもって分かち与える行

為を教えられ、完全な者となるようにと諭された。56.1) 実に主は、美しく富むことを阻んでいるのではなく、不正な仕方であらうに富むことを禁じているのである¹³。＜不正をもって、急いで掻き集めた財産は減ってゆく＞（箴言 13,11）と言われる。＜蒔く者はより多くし、集める者は少なくする＞からである。このことについてこう記される。＜彼はふるまい与え、貧しき者たちに与えた。彼の正義はとこしえに留まる＞（詩篇 111,9）。2) というのも＜蒔いてはより多くを集める＞者は、地上的なもの・時宜に適ったものを分かち与えることによって、天上的なもの・永遠なるものを獲得するのに対して、他方誰にも分かち与えず、虚しくも＜地上に蓄える者は、その富を虫や錆がなきものとする＞（マタイ 6,19）。このことについては、こう記されている。＜報酬を集めても、穴の空いた袋に集めるようなもの＞（ルカ 11,34）。3) 主は福音書の中でこう告げる（ルカ 12,16-20）。このような者の土地が、大豊作になった。彼は作物をしまっておこうと望み、もっと大きな倉庫を建てようとして、ほくそえんでこう自らに向かって言った。＜これから何年も生きてゆくための蓄えがお前には整った。食べ、飲め、楽しめ＞。だが神は＜愚か者よ、今夜、お前の靈魂は取り上げられる。お前が備えたものは、いったい誰のものになるのだろうか＞と言ったと。

VII. 節制のキリスト教的アイデア。

57.1) 人間の克己(enkrateia)とは、ギリシア人の哲学者たちによれば、欲情と闘い、行為において欲情に仕えないことだと言われている。しかしわれわれによれば、欲情を起こさないことである。それは、人が欲情を起こしても抑制するというのではなく、欲情を起こすこと自体が制されるためである。2) このような抑制は、神の恩寵なくしては、決して身につけることができない。それゆえ＜求めよ、そうすればあなた方には与えられるであろう＞（マタイ 7,7）と語られるのである。3) かのモーセも、このような恩寵を得て、肉体的には事欠いていたのに、四十日の間、飢えることも

¹³ この発言には、クレメンスによる別の著作『救われる富者は誰であるか』における主張との共通性が認められる。

渴くこともなかった。4) 健康であることの方が、病める者が健康について語るよりも優れているのと同様、光が存在することの方が光について語ることも、そして真理に基づいた節制の方が、哲学者たちによって教えられた節制よりも優れているのである。5) 光の存在するところ、そこに闇はないのと同様である。しかるに情欲が根づいているところでは、たとえ肉体による活力で情欲が鎮められても、存在しないものに対し、記憶とともに実体化して、情欲だけは残る。58.1) しかるに総じて、結婚や食物、その他の事柄を、われわれとしては先に終えておき、何事も情欲に従って行うことなく、ただ必要不可欠な事柄だけを望む。なぜならわれわれは情欲の子ではなく、神の意向の子だからである。2) そして、子作りのために結婚した者は、克己心を鍛錬することが必要である。つまり、愛すべきである自らの妻を、欲するのではなく、真摯かつ節度を伴った意向をもって子作りに励むのである。なぜならわれわれが学んだのは、＜情欲へと肉の思いを用いる＞（ローマ13,14）ことではなく、＜日中のように、慎ましやかに＞キリストに倣い、光に満ちた主の導きのもとに＜歩こうではないか、酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いと妬みを捨てて＞（ローマ13,13）ということだからである。59.1) というのも、なにか一種類のこと、つまり性愛、に関してだけでなく、われわれの靈魂が、必要不可欠なものに満足せず、奢侈に傾き、放縦にも欲求する限りの他の事柄についても克己を理解するのが適切だからである。2) 克己とは、金銭を軽んじ、欲情、蓄財、観劇の類には心を高くもって接し、口を慎み、悪しき考えを制することである。すでに、ある天使たちも、情欲に囚われて無節度となり、天からこの地上へと墜落したと言われている。3) しかるにウァレンティノスは、アガトポデスに宛てた書簡の中で、＜彼はすべてに耐え忍び、克己心があった。彼はイエスの神性と同じ働きをなし、食べるにも飲むにも特有の仕方により、食物を認めなかった。彼にあって克己の力はこれほどまでに強く、彼のうちにおいて食物が腐敗することはなかった。なぜなら彼自身が腐敗することがなかったからである＞と言う。

4) しかるにわれわれとしては、主に対する愛と、美そのものによる克己を歓迎し、聖霊の神殿を聖としよう。というのも美とは、あらゆる情欲か

ら離れて<天の王国のために自らを独身とする>(マタイ19,12)ことであり、
<生ける神に仕えるために、死した業から良心を清めておく>(ヘブライ9,14)
ことだからである。60.1) 一方ある人々は、肉的な事柄に対する憎悪から、
結婚による共棲、あるいは適切な食物の摂取から、恩知らずにも解放されることを切望する。これは無学にして神を信じない態度であり、非理性的な克己と言うべきである。それは他の多くの異邦人の場合と同様である。2) 実に、ブラフマンたちは、動物を食さず、酒も飲まない。しかも彼らのある者は、われわれと同じように日毎に食物を摂るが、彼らのある者たちは三日ごとに摂るとされる。これはアレクサンドロス・ポリュイストールが『インド誌』の中で述べていることである。彼らは死を軽んじ、生きていることを何とも思っていない。彼らは再生があると信じており、ある者たちは¹⁴ヘラクレスとパンを信じている。3) インド人たちのうちセムノイと呼ばれる人々は、一生の間裸形で過ごすと言われている。彼らは真理を崇敬し、将来の事柄を予言し、一種ピラミッドのようなものを崇めている。彼らはその下に、誰か神の骨が収められていると考えているのである¹⁵。4) 裸形行者たちも、セムノイと呼ばれる人々も、妻を娶らない。というのもそのような事柄は、本性に反し法にもとることであると彼らは考えているからであり、こうすることで彼らは、自らを浄らかに保つとしている。またセムノイの女性たちも処女を通す。彼らはこのようにして天上的な事柄を見定め、天上の徴を通して将来の事どもの幾ばくかを予知できると考えているのである。

VIII. 異端者によって引用される結婚に関する聖書の箇所。

61.1) さて善悪無記 (adiaphora) の論を導入することで、彼らは必然的に、ある種の少数の聖書箇所は彼ら自身の放縦に同意していると思うようになった。その際、彼らはこの放縦に関しても、<過ちはあなた方を支配してはいない。なぜならあなたがたは律法の下にはおらず、恵みの下にい

¹⁴ スィルブルグの提唱読みによる。

¹⁵ 仏舎利信仰との関連が想起されよう。

るのだから> (ローマ 6,14) と考えている (その他この類の事どもについても同様である。それらをここで思い起こすのは良いことではない。というのもわたしは海賊船を装備しているのではないから)。ではここで、わたしは彼らの試みを手短に切り込むことにしよう。2) かの正真正銘の使徒は、先述の言辞を用いて、告発を免れようとしている。<ではどうなのか。われわれは律法の下ではなく、恵みの下にいるのだから、罪を犯してよいということなのだろうか。決してそうではない> (ローマ 6,15)。このように使徒は、神を味方につけ、また預言者的に、快樂に関するソフィスト的な術を一刀両断に打ち砕いているのである。62.1) 見たところ彼らは、次のことを理解していないようである。<わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、各々が肉体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならない> (2 コリント 5,10)。それは、その人が肉体を通して行ったことを受け取るためである。2) <だから、もしある人がキリストのうちにあるなら、それは新しき創造である> (2 コリント 5,17)。つまりその新しき創造とは、もう罪を帯びるものではないのである。<昔のものはもう過ぎ去った>。われわれは昔の生を洗い流したのである。<見よ、新しきものとなった>。姦淫から浄さへ、不埒から克己へ、不正から正義へ、である。<正義と不正とに、どんな関わりがあるだろうか。光と闇に、どんな交わりがあるだろうか。キリストとベリアルに、どんな調和があるだろうか。3) 信仰と不信仰に、どんな関係があるだろうか。神の神殿が偶像との間にどんな一致があるだろうか。われわれは、このような約束を受けているのだから、肉と霊とのあらゆる汚れから自らを浄め、神への畏れのうちに、聖性を完遂しようではないか> (2 コリント 6,14-16 ; 7,1)。

IX. 異端者はサロメに語られた、結婚を難詰する言葉を引くこと。

63.1) さて、体裁の良い「克己」を掲げ、神による創造に抗う者たちは、サロメに向けて語られた言葉をも引用する。この言葉に関しては、先に言及した (『ストロマテイス』 3.6.45.3)。思うに、これは『エジプト人たちによる福

音書』の中に伝えられていることであろう。2) 言われていることには、主自らがこう述べたとされる。〈わたしは女性の業を廃止するためにやって来た〉。ここで「女性の業」とは欲情の行為であり、業とは誕生と腐敗である。では彼らは何と解しているのでしょうか。このあり方での経綸が廃されたというのでしょうか？ 彼らはそうは言わないであろう。なぜなら世界は同じ経綸の下に留まっているのであるから。3) だが主が偽りを述べるはずがない。なぜなら本当に、主は欲情の業、すなわち金銭欲、勝利欲、名誉欲、女狂い、少年愛、美食、浪費癖、あるいはその類の事どもを廃絶されたからである。だがそれらの発端は靈魂の腐敗であり、われわれが〈躓きゆえの死者〉（エフェソ 2,5）となっていたためである。そして女性的な無自制とはこのことである。4) しかるに創造のうちにあるものの誕生と腐敗とは、原理上、生起するのが必然であり、それは全面的な裁きと選びの復興（apokatastasis）に至るまで継続される。これにより、世のうちに織り込まれている諸々の実体が、その固有性へと割り振られるのである。

64.1) ここから、おそらく御言葉がこの完成の時（synteleia）について告げた際、サロメがこう述べたのである。〈いつまで、人間は死を味わうのですか？〉。ところで聖書は人間を二通りの仕方で述べる。一つは外側に現れている部分であり、もう一つは靈魂である。あるいは、救われる部分とそうでない部分である。そして罪は「靈魂の死」と語られる。それゆえに主は、慎重に言葉を選んでこう返答する。〈女性たちが出産する限り〉。これはすなわち、欲情が働き続ける限り、の意である。2) 〈それゆえ、ちょうど一人の人間によって罪が世に入り込んだのと同じように、罪によって死がすべての人間に及んだ。罪のために、人はすべて死ぬのである。そして死が、アダムからモーセに至るまで支配していた〉（ローマ 5,12 ; 5,14）と使徒は語っている。しかるに本性的な必然により、神的な経綸による誕生には死が続き、靈魂と肉体の結合体には、それらの解体が相伴う。3) しかしもし、誕生が学びと認識（epignōsis）のためのものであるなら、解体は万物復興（apokatastasis）のためのものである。死の原因が、出産を通じて、女性であると考えられるのであれば、それと同様に、同じ理由により、女性は生命の導き手とも語られるであろう。65.1) 逸脱を先導するも

のが「生命」(創世 3,20)と語られ、それによって、生まれ来る者どもと罪を犯す者どもの交代の原因が生じる。この「生命」は、不正なる者どもの母ともなると同様に、正しき者どもの母ともなる。それはわれわれの各々が、自らを正すか、もしくは逆に不従順を決め込むかにかかっている。2) ここからわたくしとしては、使徒が次のように述べるとしても、肉のうちなる生命を嫌悪したとは考えない。<どんな時も今も、生命によってであれ死によってであれ、まったく妨げなく、キリストがわたしの身において讃美されることを願う。わたしにとって生きることはキリストであり、死ぬことは益である。でももし肉のうちに生き続けるなら、それはわたしにとって業の実りであり、どちらを選択すべきか、わたしは知らない。わたしはこれら二つの板ばさみ状態にある。一方で、この世を去ってキリストとともにありたいという願いを有しており、この方がはるかに望ましい。でも他方、肉に留まることはあなた方にとってより必要であろう>(フィリ¹ 1,20-24)。3) 思うに使徒がこれらの言葉によって明らかに示したのは、肉体からの離脱の完遂は神への愛であるが、肉のうちにあることを完遂するのは、救いを必要とする人々のための感謝を込めた忍耐なのだということである。66.1) だがサロメに向けて語られた事柄の、それに続く部分を、真理に基づく福音の規範によるよりもむしろすべてをでっち上げる人々が、どうして付言しないのだろうか。彼女はこう言うのである。<わたしは子を産まなくて良いことをしました>。これは彼女にとって、出産に携わることが必要でなかったということの意味する。これに答えて主はこう語る。<どんな草でも食してよいが、苦味を持つ草は食べてはならない>。3) この言葉によって主は、克己であれ結婚であれ、われわれに可能な行動であり、掟による阻止が必要な事柄ではないこと、それに加えて、結婚は創造行為に協働するものであるということを示しているのである。67.1) したがって、もし育児を苦いことだと受け取らない限り(多くの者にとっては逆に、子のないことがより苦悩をもたらすのだから)、御言葉にしたがっての結婚を罪だと考えてはならない。あるいはまた育児が、たとえ必要不可欠な多忙さのゆえに神的な事どもから気を散らさせ、ある人には苦いものだと映っても、そのために結婚を離れた独身での生のほうが楽だと考

え、そちらを望むことがあってはならない。なぜなら、賢慮を伴っての悦びには罪がないし、われわれの各々が主体的に、子を儲ける選択をすることができるのだから。2) しかしながらわたくしとしては、次のようなケースも知っている。それは、結婚を口実にしながら結婚生活から逃れ、聖なる覚知によることなく、人間嫌いに堕ち、愛の業が彼らから消えるような場合である。あるいはまた、法の網に絡め囚われ、むしろそれを楽しんでしまって、ちょうど預言者が言うように<家畜にもなぞらえられる> (詩篇 48,13 ; 48,21) さまになるような場合である。

X. 『マタイ福音書』 18,20 に関する神秘的解釈.

68.1) ところで、<キリストの名のうちに、2人また3人が集うとき、彼らの中心には主がいる> (マタイ 18,20) と言われる場合の「2人また3人」とはいったい誰のことであろうか。あるいは夫と妻、そして子供を「3人」と呼んでいるのではないだろうか。なぜなら妻は夫に、神によってめあわされるのであるから。2) しかしある人が、係累を持たないでいたいと望み、子を儲けた際の多忙のゆえに、子を儲けることを選択しないのであれば、使徒は言う。<わたしのよう、独身に留まるがよい> (1コリント 7,8)。3) というのもある人々の解釈によれば、主がここで言わんとしたことは、多くの人々にあっては創造者が誕生をもたらす者であるが、選ばれた唯一人にあっては救い主であり、それはすなわち、救い主が別の善き神の子として生まれた、という意味だということである。しかるにこれは正しくない。むしろ、賢慮をもって結婚し、子を儲ける人々にあって神は子を通して現れるが、御言葉とともに克己に励む人々にあって、神はその同じ神だという意味である。

5) だがまた他の解釈を施す人々もある。彼らによれば、この「三者」とは、気概と欲求と理知、換言するならば肉と霊と魂だとされる。69.1) もしかすると、先に言われた「三者」とは呼び名であり、第二番目は「選別の器」を、そして第三番目は、第一の誉れに向かうべく備えられた種をほのめかすものなのかも知れない。これらをもってしても、すべてを見そな

わす神の力は、分かつたることなく分かつたれる。2) かくして靈魂の本性的な働きを必要に応じて用いる方は、まず相応しきものを欲し、次いで傷つけるものを憎む。それは掟が命じているとおりである。＜あなたは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者を呪うがよい＞（創世 12,3）。3) だがこれら、すなわち気概と欲求とを凌駕し、万物の神そして創造者である方を通じて被造物を愛するとき、覚知をもって生活することになるだろう。それは克己の状態を苦もなく現出し、救い主に似ること（*exhomoiosis*）を通じて、覚知・信仰・愛を統一した状態である。4) 彼はこの世にあって、判断において一貫し、真に靈的存在となり、憤怒と欲情に関わる思念をいかなる場合にもまったく受け取ることなく、主の＜似像＞（創世 1,26）として、創造者自身に倣って完成され、完全な人間となる。すでに彼は、主にとっての「兄弟」と呼ばれるに相応しき者となり、併せて主の「友」また「子」ともなる。かくして「二人また三人」は同一の意味に集約される。それは「覚知者たる人間」である。

70.1) さて、三者をもって数えられる多者の一致が語られる際、彼らとともに主がおられるということは、一なる教会、一なる人間、一なる種族といった場合にも当てはまるであろう。2) 主は、一人のユダヤ人【モーセ】の傍らでは律法者を務め、預言者としてはすでにエレミヤをバビロンに遣わした¹⁶。そればかりでなく、預言職のために異邦人から複数の人々を呼び、二つであった民を集め、新たな人に向けて二者から創造された者は、第三位格となり、その位格【聖霊】のうちに教会に歩み住まわれるのではないだろうか。3) つまり律法と預言者たちは、福音とともにキリストの名において、一なる覚知に向けて集められるのである。4) であるから、憎しみのゆえに結婚しない者たち、あるいは欲情のために善悪無記のふりをして肉を乱用する者たちは、かの救われる者たち、主が彼らとともにおられる人々の数のうちには数え入れられないのである。

¹⁶ この記述に関しては、クレメンスの思い違いか、もしくはユダヤ教の伝承からの引用である可能性が指摘されている。

XI. 欲情に対する律法とキリストの教え.

71.1) ここで、以上の事柄に関してはすでに証明が終えられたとし、異端に与するソフィストたちに対して、聖書がどれほど反対しているかについて、いまや提示することにしよう。その際、ロゴスに基づいて守られる克己の規範について示すことにしたい。2) さて、異端の各々に固有の仕方
で根ざしている書物を、理解あるものは選択しつつ、時に応じて用いている。それは、掟に基づいて教説を立てる者どもを打ち砕くためである。3) すでに述べたように、**<汝の隣人の妻を欲してはならない>**（出エジプト 20,17）という法は上から来たものである。これを、われわれは主の新しい掟に基づく特別な声、次のように自ら語るものよりも前に置いた。**<あなたがたは律法がこう定めているのを聞いている。「姦淫するな」と。しかしわたしは言う。「欲情を抱くな」と>**（マタイ 5,27）。4) というのも律法が、夫たちが節度をもって結婚している妻を、ただ子作りのためだけに用いることを望んでいるということは、結婚していない男性が、女捕虜と直ちに交わることを禁じていることから理解される。すなわちその男性が女捕虜に欲情を抱いたなら、彼女は髪を下ろし、爪を切り、捕虜の衣服を脱いで、あなたの家に住み、自分の両親のためにまず 30 日の間嘆かねばならない（申命 21,12-13）。だがこのようにしてもなお欲情が鈍らないならば、そのときには、情動のためにこれだけの時間をロゴスにのっとなって措いたことにより、なおそれに勝る衝動が正当化されたのであるから、子供を儲けることが許されるのである。72.1) あなたは聖書の中で、父祖たちの誰かが、懐妊中の妻と交わったという例を挙げることはできないであろうが、その理由はここにある（『パイヤゴス』 2.10.92.2）。だがそののち、出産の後あるいは幼児への授乳の後、ふたたび夫によって知られる妻の例は見出せるであろう。2) このあり方は、モーセの父親も守っていることが理解されよう。兄アアロンの誕生の後 3 年を置いてから、モーセが誕生しているからである（出エジプト 7,7）。3) またレヴィ族は、神に由来するこの本性的な法を守っていたために、他の部族に比して数の上で少ない状態で約束の地に入った（民数 3,39）。4) 律法に従った結婚を受け入れている男性が種を蒔く場合、出産のみならず、授乳に関しても律法に従うなら、その種

族が人口の面で増加することは、容易ではないのである。73.1) この故にモーセは、相応しくも克己に関してほとんど歩みを進めることなく、ユダヤ人たちには<三日の間>ばかり、性愛の快楽を慎み、神的な言葉に聴従するよう命じたのであった(出エジプト 19,15)。2) <われわれは神の神殿である。それは預言者が「わたしは彼らのうちに住み、巡り歩く。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」(レヴィ 26,11-12; エリヤ 32,38; エゼキエル 37,27) と言っているとおりである> (以下 2 コリント 6,16-18)。これは、もしわれわれが、個々人においてであれ教会一丸となってであれ、掟に従って生活する場合のことである。3) <「だから、お前たちは彼らの中から出て行き、縁を切れ」と主は語る。「また、穢れたものに触れてはならない。触れなければ、わたしはお前たちを受け入れ、わたしはお前たちの父となり、お前たちはわたしの息子また娘となる」。全能の主はこう語られる>。4) ここで語られている「彼ら」に関しては、結婚している者どもばかりではなく、なお姦淫のうちに生きている異邦人も含まれ、さらには前述の諸異端も含まれる。そして彼らを不浄なる者・神を知らぬ者として、われわれは彼らから縁を切るべきである、と預言者的に命じられているのである。74.1) ここからパウロも、前述の者どもと同様の人々に向かってこう述べる。<愛する者たちよ、あなた方はこのような約束を有しているのだ。だからわれわれは、肉と霊のあらゆる穢れから自分たちの心を浄め、神に対する畏れのうちに、聖性を完成させようではないか> (2 コリント 7,1)。<というのもわたしは、神の熱情でもって、あなた方に対して熱い思いを懸けているのだ。わたしはあなた方を、キリストという一人の夫に、穢れなき処女としてめあわせることにしたからだ> (2 コリント 11,2)。2) 教会は、キリスト以外の他の花婿を獲得して結婚することはない。一方われわれの各々は、もし望む女性があったなら、法に則って結婚(最初の結婚である)をする上での権利を有している。3) <ただわたしが恐れるのは、蛇がエヴァを悪だくみで欺いたように、あなた方の思いが腐敗して、キリストへの純真な心から離れてしまうのではないかということなのである> (2 コリント 11,3) と、使徒は、敬虔にまた教えを込めて語っている。75.1) それゆえ、驚嘆すべきペトロもまた、こう述べている。<愛する者たちよ、わたしは

あなた方に勧める。旅人の身であり，仮住まいの身なのだから，肉的な欲情を遠ざけよ。それらは靈魂に対して戦いを挑むものであるから。そして異邦人たちの間で，あなた方の生き方を美しく保つがよい。2) こうすることこそ神の御心なのだから。善を行い，思慮に欠けた人々の行いを封じ込めよ。あなた方は自由人なのであり，自由を，悪の覆いとして有しているわけではなく，むしろ神の隷僕なのであるから> (1ペトロ 2,11 以下；2,15 以下)。3) 同様にパウロもまた『ローマ人への書簡』の中でこう記している。それは<罪に対しては死んだわれわれが，どうしてなお罪のうちに生きていることができようか。われわれの古い人間は，キリストとともに十字架に懸けられたのであるが，それは罪の身体を終わりにするためなのである> (ローマ 6,2) から，<あなた方は自分の四肢を，罪のための不義の武器としてはならない> (ローマ 6,13) までである。

76.1) わたくしとしては，ここに至って，次のことに言及せず省略してしまうべきではないと考える。すなわち使徒は，律法・預言者・福音を通じて同一の神の語りが見られるということを告げているのである。というのも福音に記されている「欲情を抱いてはならない」(マタイ 5,27) という掟を，使徒は『ローマ人たちへの書簡』の中で律法に関連させているが，これは彼が，律法と預言者を通して告げた唯一なる方が，自らを通じて福音として布告される父であるということを理解しているからである。2) 使徒はこう述べる。<ではどうなのだろうか。律法は罪であろうか。決してそうではない。むしろわたしは，律法を通じてしか罪を知らなかった。つまり「欲情を抱いてはならない」(出エジプト 20,17；申命 5,21) と律法が命じていなかったなら，わたしは欲情を知ることがなかったであろう> (ローマ 7,7)。3) 異端説を奉ずる対抗派は，パウロが創造者に抗して以下のことを述べていると受け取るかも知れない。<わたしは自分のうちに，すなわち自らの肉のうちに，善が住んでいないということを知っている> (ローマ 7,18)。だが，先に語られたこと，そしてさらに付言されることをよく読んでみるがよい。まず次のように先述している。<わたしのうちに住んでいる罪> (ローマ 7,17 以下)。けれども使徒は，その罪の関連で<わたしの肉のうちに善が住んでいない>と述べるに至ったのである。77.1) さらに以

下で彼はこう付け加えている。〈もしわたしが、自分の望まないことをしているとすれば、もはやそれを為しているのはわたしではなく、むしろわたしのうちに住んでいる罪なのだ〉（ローマ 7,20 ; 7.23 以下）。この罪とは、神の〈法〉、また〈わたしの理性〉と戦っている（ローマ 7,23）と使徒は述べる。〈それはわたしの四肢において、本当に、罪の法のうちにわたしを捕虜にしている。わたしは人間として隣れである。だれがわたしを、この死の肉体から解放してくれるのか〉。2) さらにはまた、彼はこう続けることをためらわない（彼は益をもたらすことには何であれ、疲れを知らない）。〈霊の法はわたしを、罪と死の法から解放してくれた〉（ローマ 8,2-4）。なぜなら子を通して〈神は、肉のうちなる罪を断罪した。それは、われわれが肉に従ってではなくむしろ霊に従って歩むべく、法の正しさがわれわれのうちに充溢するためである〉。3) これに加えてさらに彼は、すでに述べた事柄を明らかにしつつ、こう叫ぶ。〈肉体は、罪のために死んでいる〉（ローマ 8,10 以下）。このことは、肉体が神殿ではなく、靈魂の墓場であることを示している。というのも神に捧げられるときに、彼は付言する、〈死者のうちから復活したイエスの霊が、あなた方のうちに住まい、この方があなた方の死した肉体を、あなた方の内に住める霊によって生けるものとするのだ〉。78.1) こうして彼は、快樂に溺れる者どもに対して論難を加え、さらにこう付け加えている。〈肉の思いは死である。なぜなら肉にしたがって生きる者は肉のことを思い、肉の思いは神と敵対関係にあるからである。肉は神の法には従わない。しかるに肉のうちにある者たちは〉（ローマ 8,5-7）、ある人々が教説化しているように〈神を喜ばせることは、不可能であり〉、むしろわれわれが先述したとおりの次第なのである。2) その後これらの者どもに対置する形で教会に向かい、こう述べる。〈あなた方は肉のうちにはではなく、霊のうちにあり、神の霊があなた方のうちに宿っている。もしある人が、キリストの霊を持っていなかったならば、その人は神のうちにいない。けれどももしキリストがあなた方のうちにおられるなら、肉体は罪のために死していたとしても、霊は義によって生命となっている。3) だから兄弟たちよ、われわれは、肉に倣い肉に従って生きていてはならない。もしあなた方が肉に従って生きるなら、あなた方は死ぬ

であろう。神の霊に導かれる者たちは、神の子らだからである> (ローマ 8,9 以下)。4) そして、放埒を標榜する異端論者たちによって、唾棄されるべく導入されている高貴さや自由に対し、付言してこう述べる。<あなた方は再び恐れに囚われるような隷属の霊を受け取ったのではなく、5) むしろ子とされる霊を受け取ったのだ。その霊にあってわれわれはこう叫ぶ。「アッパ、父よ」> (ローマ 8,12-15)。すなわちわれわれがこの霊を受け取ったのは、われわれが祈りを捧げている方が誰であるかを知ることができるためであり、その方こそ真の父であり、その方が諸存在の唯一なる父であり、その方こそ、救いに向け、父として教育を施し恐れを遠ざける方なのである。

XII. 結婚に関する聖書の諸節の解説。

79.1) しかるにく思いを一つにし、しばらくの間祈りに専心する> (1 コリント 7,5) というかたちでのくびきは、克己の模範である。というのも使徒は「思いを一つにし」と付言しているが、これは誰も、結婚の絆を解くことの無いようにするためである。一方「しばらくの間」というのは、強いられて克己を実践することにより、結婚している者が、くびきを同じくしている者を遠ざけ、他の女性への欲情に陥って、罪に染まるようなことにならないためである。2) この論理に則って、使徒は、処女性を守り自らを節すると誓った者も、娘と結婚することは美しいと述べている (1 コリント 7, 36)。3) 自らを独身生活に定めるにせよ、子孫を遺すために結婚の絆を結ぶにせよ、その目的は、より優れたものに向かうように、厳格に保たれねばならない。4) というのももし、彼が生を献げ尽くし得るならば、彼は神において、自らのためにより大きな価値を獲得するであろう。浄らかにして理性的な自制の生を送ったことになるのだから。だがもし彼が、より大いなる栄光のために選び取った規律を踏み外してしまったなら、その際彼は希望を失ってしまうだろう。5) というのも、独身生活と同様に結婚生活も、異なった勤めと奉仕とを主に対して有しているのだから。つまり結婚生活には、子供と妻を守る務めがある。というのもおそらく、結婚生活に

関して完全であろうとする男性は、共通の家庭に関してすべてにわたる配慮を示すとき、共なるくびきの固有性が動機となる。6) まさしくパウロが、
「司教は自らの家をよく維持し、すべての教会をよく治めることに心を砕くべきである」(1テモ3,4)と述べている。7) 実に「各人、各々が呼ばれている」(1コリント7,24) 仕事において、キリストにおいて自由となるために、奉仕をまっとうし、奉仕による個々の報酬を受け取るべきである(1コリント7,22)。80.1) また彼は、律法について述べる際に寓意を用いて、こう語っている。それは「結婚した女性は、夫の生存中は律法によって夫に結ばれている」(ローマ7,2)以下の部分である。また使徒はこうも述べている。
「妻は、夫が生きている期間中は夫に結ばれている。だが夫が死ねば、再婚するのは自由であるが、ただ主においてのみに限られる。けれども、わたしの考えでは、もしそのままの状態に留まっているなら、彼女は幸いであろう」(1コリント7,39以下)。2) だが前に挙げた一節において、使徒はこう述べている。「あなた方は律法によって死んだ者となっている」(ローマ7,4)。すなわち「結婚によって」ではない。それは「あなたが、死者のうちから復活させられた、他の方のものとなるためである」。つまりそれは花嫁そして教会として、との意である。花嫁すなわち教会は、内なる思いに関しても、真理に反して外界から試みをなす者どもに対しても、浄らかでなければならない。その者どもとはすなわち、異端に随従し、一人の夫つまり全能の神から離反して姦通を犯すように説得するような者どものことである。これは「もうヘビがエヴァを欺くことのないように」(2コリント11,3) するためである。ここでエヴァは「生命」と呼ばれる存在である。そしてわれわれが、諸々の異端に随順し、飽食の不正のために律法を犯すことのないようにするためなのである。3) 一方、第二番目の一節では結婚の一回性を定めている。これはある人々が解釈しているように、妻の夫との絆が、肉の腐敗への繋がりを意味するなど受け取るべきではない。というのも使徒は、結婚の発明を直ちに悪魔に結びつけるような神をも知らぬ人々の着想は、律法者をも誹謗するものだとしてこれを論駁しているか

らである。81.1) 思うにシリア人のタティアノス¹⁷は、このようなことをあえて教説化しようとしている。すなわち彼は『救い主による鍛錬について』という著作の中で、次のような筆致で記しているのである。〈和合は祈りと調和し、共同生活は腐敗の交わりを断つ。双方の合意の許に、恥じ入らせる仕方で禁じるのである。2) というのも一体となることへの合意は、サタンと不節度のゆえなる行いであり、それに納得する者は「二人の主人に仕えようとする」ことを表明したことに他ならない。和合によって神に、不和によって不節度・姦淫・悪魔に仕えることになるのだから〉(タティアノス、断片 5)。3) 彼がこのようなことを述べるのは、使徒の言葉を解釈してのことである。しかし彼は、真なる虚偽によって真理を歪曲しているのである。4) なぜなら不節度と姦淫が、悪魔的な情動であるということについては、われわれも同意する。だが節度ある (sōphrōn) 結婚に関しては、克己をもって (enkratēs) 祈りに向かうと同時に、子作り (paidopoia) のために真摯に結婚する、という仕方で、調和 (symphōnia) が仲立ちをする。5) 実に、子作りの時機も聖書では「覚知」(gnōsis) と呼ばれているのである。それは次の箇所である。〈アダムは、おのが妻エウアを知った (egnō)。するとエウアは男の子を産み、「神が私に、アベルに代わる新たな種を興された (シャト)」という意味でシェトと名付けた〉(創世 4,25)。6) 節度ある生殖を忌避する者どもが、一体誰に対して誹謗をしているか、お分かりであろうか。彼らは誕生を悪魔に帰しているのだ。なぜなら彼は、冠詞を付することによって全能の方を指し示しながら、その方を単に「神」とは呼んでいないのである。82.1) 一方、使徒による付加句〈あなた方の放埒さのために〉¹⁸から〈ふたたび一緒になる〉までの部分 (1 コリント 7,5) は、他の女性への欲望に逸らされないことがないように、その可能性をあらかじめ閉ざしているのである。というのも一時的な合意だけでは、本性的

¹⁷ 紀元後 120 年ごろ生まれたシリア人。護教家・殉教者ユスティノス (後 100-165) の弟子となり、ローマで回心したが、172 年ごろ東方に戻り、「克己派」と呼ばれる禁欲主義セクトの首領となった。

¹⁸ シュテラーリンのテキストでは「サタンのために」*διὰ τὸν σατανᾶν* となっているが、文意および 1 コリント 7 章の原文から推察し、テキストを *διὰ τὴν ἀκρασίαν* と変改する試みを提唱したい。

な衝動を完全に駆逐して消去するには至らないからであり、使徒はその衝動を消すために再度、結婚による絆を提示する。それは放埒と姦淫そして悪魔の業に陥るためではなく、むしろ放埒、姦淫、悪魔に屈することのないようにするためなのである。2) しかるにタティアノスは、旧き人と新しき人とを切り離すが、われわれと同様の述べ方をしない。旧き人とは律法であり、新しき人とは福音であるということについてはわれわれも同意するし、彼らもそう言っている。だが彼が、律法を別の神の手になるものだとして否定する点については別であり、われわれはこれに反対する。3) 同じ方、同じ主が旧約を新たにし、一夫多妻はもはや認めず一旧約の頃は、人が増え地に満ちる必要があったので神がそう望んだのだ一、子作りのためまた家族を気遣うために一夫一婦制を導入し、その目的で妻が<助け手>として与えられたのである。4) そしてもし使徒がある人に対して、放埒と熱情を制するために「認可」の意味で、第二の結婚を許し、しかもこの人が律法の観点で罪を犯してはいない（律法に照らして禁止されてはいない）としても、彼は福音に基づく生き方の、特別な完全性を満たしていることにはならない。5) むしろやもめの状態のまま留まるなら、彼は自らに天上的な栄誉を付与すべく、死によっても解かれることのない絆を汚されぬまま保ち、経綸に適わしく従い、それによって主の典礼から引き裂かれることがなくなる。6) ただ彼に対しては、主による神的な先慮が、絆による共棲から、かつてと同様に洗礼を受けるようにと命じているわけではない。というのも主が、信じる者たちを、一度の洗礼により、完全なる福音の実践に向けるべく子作りからも引き離す、ということは必要なかったためであり、またモーセによる幾多の規定をも、一度の洗礼において取り込んだためである。83.1) 当初より律法は、われわれの再生を予言しつつ、肉的な誕生に関して、誕生のための精の漏出の際に、身を洗うよう定めているが（レ¹ 15,16）、これは人間の誕生を厭っているのではない。というのも人が生まれるということが明らかな場合、それは精の漏出によって為しうることだからである。2) だが多くの場合、交合が子を儲けるに至ることはなく、母親の受諾が誕生に同意した場合に、精が自然の工房の中で、胚にむけて形成され始める。3) どうして結婚が、旧約の時代だけに限られ律

法の発見物であって、主による結婚が、われわれのために同じ神が配慮されたものであるにもかかわらず別種のものだということがありうるだろうか。4) <神がつなぎ合わせたものを、人間が解くことがあってはならない> (マタイ 19,6) のは、至極理に適っており、父が定めたことを、子もまたはるかに厳格に守っているのである。もし同一の律法者が福音を告げる者でもあるのなら、自らに反発することはありえない。律法は、霊的な存在として生きており、覚知をもってしても思念されるのである。5) しかるにわれわれは<律法において死に、キリストの体を通じて他の者、死者から蘇った者になる> (ローマ 7,4)。すなわち、律法によって預言されていた方になる。これは<神においてわれわれが実を結ぶため>である。84.1) それゆえ、<律法は聖であり、掟は聖にして義しく、善きものである> (ローマ 7,12)。であるからわれわれは、律法において、すなわち律法によって明らかにされた罪に死んだ。その罪とは、律法が産んだものではなく、明らかにしたものである。律法とは、為すべきことの命令、為すべきでないことの禁令を通じて、その背後にある罪を駁し、<罪が明らかになるようにする>ためのものである。84.2) もし律法に基づく結婚が罪なのであれば、神の掟が罪であるということになり、そのように言う者がどうして「自分は神を知悉している」と言えるのか、わたしには分からない。律法が聖であれば、結婚も聖である。そして使徒は、この神秘をキリストと教会へと結びつけているのである (エペソ 5,32)。3) ちょうど<肉から生まれたものは肉であり、霊から生まれたものは霊である> (ヨハネ 3,6) のは、誕生に関わるだけでなく、学びにも関わる。<子供たちは聖である> (1 コリント 7,14) のは、彼らが嘉せられるものだからであるが、主の言葉は、靈魂を神に花嫁として結びつける。4) 実に、姦淫と結婚はまったく別のものである。それは悪魔が神から遠く隔たっているのと同様である。<そしてあなた方は、律法において死した者となり、キリストの体によって他の者、死者から蘇った者となった> (ローマ 7,4)。この意味も、熱心に耳を傾けるならば自ずから理解されるであろう。律法の真理に基づいて、同じ主が勧告している事柄にわれわれは耳を傾けるのであるから。85.1) そして次の一節は、まさしくこのような事柄に関係するのではないだろうか。<霊は、次のよう

に告げている。終わりの時には、ある者たちは信仰から離れ、迷妄の霊と悪霊どもの教えに専心し、偽りを語るものたちの欺きに陥る。彼らは良心に焼き印を押されており、結婚を禁じたり、ある食物を食べてはならないと言ったりする。だがそれらは神が創造されたものであり、信じる者たちは、感謝をもって、真理の認識とともに与かるべきものである。なぜなら神によって創造されたものはすべて美しきものであり、感謝をもって受け取るならば、何一つ拒むべきものはないからである。それらは神の言葉と執り成しを通じて聖とされる> (1テモテ 4,1-5). 2) であるから、結婚や肉食、飲酒を禁じたりすることは、決してあってはならない。なぜならこう記されているからである。<肉を食さないこと、あるいは酒を飲まないことは、美しい> (ローマ 14,71) が、それはもしそれらを食す場合に躓きになるのであれば、の意である。そして<わたしと同じような立場に留まるとすれば、美しい> (1 コリント 7,8)。だが必要であれば<感謝をもって>、あるいは必要がない場合でも、自分としては<感謝をもって>、また克己心に満ちた享受をもって、御言葉にしたがって生活すべきである。86.1) 総じて使徒の書簡はすべて、結婚と子作り、家庭の管理をめぐる、節制 (sōphrosynē) と克己 (enkrateia) を教え、数限りない掟を盛り込んでいるが、節制ある結婚を決して不法とはしていない。むしろ律法の連関を拒むことなく福音に照らしつつ、感謝のうちに神に嘉せられる結婚を節制をもって択ぶ者、主が<人は皆呼ばれている>と述べて望んでいるような独身状態を選び、躓くことなく完全なかたちで生きる者、の双方を受け入れている。

2) また、預言者は<ヤコブの土地は、すべての土地にまさって祝福される> (『バルナバの書簡』 11,9) と述べているが、これは霊の器を讃えているのである。3) しかるにある人は、誕生を非難し、腐敗し墮落したものだと言って、無理やりに、救い主が<シミや錆がなきものにするような場所に、宝を蓄えてはならない> (マタイ 6,19) と語ったのは子作りのことであったと解し、この言葉に、預言者の次の一節を付言することを恥じない。<あなた方はみな、衣のように古び、シミが食いつくすであろう> (イザヤ 50, 9)。4) われわれはこの聖書に対して反駁することをせず、われわれの肉体が腐敗するもので、本性的に朽ち行くべきものであることを否定しない。

おそらく預言者は、語りかけた相手が罪人であったために、その腐敗を予言したのかも知れない。けれども救い主は、子作りのことについて述べたのではなく、富を余るほどにまで獲得することだけに専心し、事欠く人々のために手を差し伸べようとしなない人々に対して、共生のために分かち合うよう勧告したのである。87.1) それゆえ主はこう述べる。〈朽ちる食物のためではなく、永遠の生命に向けて留まる食物を獲ち得るように働くがよい〉(ヨハネ6,27)。同じように、彼らは次の句も引き合いに出す。〈かの世の子らは、娶ることも嫁ぐこともない〉(ルカ20,35)。2) しかしながら、死者の復活をめぐるこの問いかけ、および問いを投げた人々について仔細に検討してみるならば、主が結婚を拒んだのではなく、復活に伴い予想されうる肉体的な欲情に関して、それを取り除いたものだということが解る。3) 一方〈この世の子ら〉(ルカ20,34)とは、子らにとって何か他の世と区別して言っているわけではなく、〈この世にある人々〉というのと同義であり、誕生による子らの意味であって、産んだり生まれたりする者のことである。なぜなら誕生なくしては誰も、この世の命に生まれ出ては来ず、むしろこの誕生は、等しく腐敗を受け取り、この世の生から一たび切り離されると、もはや留まることはないからである。4) 〈ただ、天におられるあなた方の父は唯一である〉(マタイ23,9)。そればかりでなく、この同じ方は創造行為にあっても万物の父である。〈あなた方は、地上の者を「父」と呼んではならない〉と主は述べる。これはたとえば、あなた方を生んだ者を、あなた方の実体の肉体的な起源であり原因であると考えてはならない、の意である。むしろ、それは誕生の共なる原因、否むしろ誕生の奉仕者である。88.1) かくしてわれわれは、子となることを主が望んでおられるのであるから(マタイ18,3)、再び回心し、真なる父を認識し、水による再生を遂げて、これを創造における起源とは別の誕生としよう。2) そう、使徒は言う。〈結婚していない男は主のことを気遣い、結婚している男は妻をどのようにして喜ばせようかと気遣う〉(1コリント7,32)。これはどういうことなのだろうか。神に従って妻を喜ばせる男たちが、神に感謝することができないと言うのだろうか。結婚している男にとって、配偶者とともに、主のことを気遣うことは許されないと言うのだろうか。3) 否むしろ、〈結婚

していない女性は主のことを気遣うが、それは彼女が、身体的にも靈的にも聖なるものとなるためである> (1 コリント 7,34) のと同様に、結婚している女性は夫のことと主のことを主において気遣うが、それは彼女が身体的にも靈的にも聖なるものとなるためである。双方とも、主にあって聖なる者である。片や妻として、片や処女として、である。4) けれども慎みのため、また再婚に向けて心が傾く者たちを阻止するために、使徒は相応しくも調子を転じ、こう述べている。<すべての罪は肉体の外にあるが、姦淫を犯す者は自らの体に対して罪を犯す> (1 コリント 6,18). 89.1) しかしもしある人が、結婚を姦通であると敢えて言おうとするのであれば、ふたたび彼は、律法と主に対して誹謗を行っていることになる。それはちょうど、貪欲が自足に対立するものであるが故に、また偶像崇拜が、一なる神から多なる神々への拡散であるが故に姦淫であると言われるのと同じように、姦通は、一なる結婚から多なる結婚への墜落なのである。というのも、使徒にあって姦通また姦淫は、すでに述べたように (『ストロマテイス』 6.147.1 ; 7.75.3), 三通りに受け取られている¹⁹。3) これらに関して預言者はこう述べる。<お前たちの罪によってお前たちは売り渡された> (イザヤ 50,1)。あるいはまたこう語られる。<あなたは他者の地にあって穢された> (バビロン 3,10)。預言者はここで、他者の身体と交わり、配偶関係による子作りに身を捧げなかった共同体を穢れたものと考えているのである。3) それゆえに使徒もまた、こう述べている。<だからわたしが望むのは、まだ若い女性は結婚し、子を儲け、家事を取り仕切り、反対者に誹謗のための口実を一切与えないことである。すでに道を踏み外し、サタンの後に随って行った者たちがいるためだ> (1 テモテ 5,14 以下)。90.1) 実に使徒は、ただ一人の妻の夫に関しては、年長者であろうと助祭であろうと一般信徒であろうと、大いに彼を受け容れている。それはその人が非難されることのない仕方で結婚生活を送っているからである。<彼女は子を産むことによって救われるであろう> (1 テモテ 2,15)。2) また救い主もユダヤ人たちのことを、

¹⁹ 快樂狂、金銭欲、偶像崇拜である。参照箇所は、いずれにしても『ストロマテイス』にあって現行の第3巻よりも後出の巻であるので、クレメンスが無意識のうちにこう述べたとすれば、『ストロマテイス』の成立過程を示唆する箇所として注目できるかもしれない。

＜よこしまで不実な世代＞（マタイ 12,39）と呼び、律法が意味するとおりに律法を知らないと言って教えを与えている。彼らは、父祖伝来の伝承と人間たちの掟に従い、律法に対して姦淫を犯し、律法を、彼らの夫また処女性の主として受け取っていないというのである。3) おそらく主は、彼らが異邦への欲情に隷従していることも知悉しておられた。彼らはこの欲情に止むことなく隷属し、異邦人の罪に身を売っていたのである。なぜならユダヤ人の間では、公共娼婦は認められていなかったばかりか、姦通も禁じられていたからである。4) ある人が、神の宴には＜妻を迎えたばかりなので行くことができない＞（ルカ 14,20）と言ったが、これは快樂のために神的な掟から離反している者たちへの論駁のための範例である。なぜならこの言葉によると、主の到来以前の正しき人々も、主の到来以降に結婚していた人々も、たとえ彼らが使徒であったとしても、救われないことになるからである。5) 預言者が＜わたしは四方を敵に囲まれてやつれ果てた＞（詩篇 6,8）と言っているとして、これを引用する人々があるかもしれない。だがここで「敵」とは罪のことだと解すべきである。罪は一つ、それは結婚ではなく、姦淫である。彼らには誕生を罪であると言わせておこう。彼らは誕生の創始者にも罪を帰すことになるであろうから。

XIII. 異端者ユリウス・カッシアノスの論拠に対する回答。

91.1) さて、仮現論主義者の首領であるユリウス・カッシアノス²⁰も、これらの事柄について論じている。実に彼は、『克己について』ないし『独身主義について』という著作の中で、次のように述べている。＜誰も、われわれがこのような四肢を有しているからといって、「女性の体のつくりはこうで、男性のはこうであり、前者は受け容れるため、後者は蒔くためのもので、この言い方は神から認められているのだ」などと言ってはならない。2) なぜなら、もしこのような組成が、われわれがそこに向かっている神から与えられたものであるなら、神は独身者を幸いなるものと呼ばなか

²⁰ 紀元後 170 年ごろにエジプトで教えたグノーシス主義者。

ったはずであるし (マタイ 19,12), 預言者も, 選択意志による考えに基づいて自らを独身者とした宦官に対し, 樹木からの比喻をもって「自分を不毛な木だとは呼ぶな」(イザヤ 56,3) と命じなかったはずだからである >. 92.1) カッシアノスはさらに, 神をも知らぬ考えを推し進めて次のように付言している. <もし救い主がわれわれを創り替え, 迷妄, および四肢と付随物それに恥部の結合体からわれわれを解放したのであれば, ある人が救い主を責めたとして, どうして非論理的なことがあるのか? >. 彼は, タティアノス²¹とほぼ同様のことを, このような発言でもって教説化している. だがカッシアノスは, ウァレンティノスの一派から離脱した者である. 2) そのためカッシアノスは, 次のように述べる. <サロメが「わたしが尋ねたことに関して, いつ知ることができるのでしょうか」と尋ねたのに対し, 主はこう言った.「あなた方が羞恥の衣を踏みつけ, 二つのものが一つになり, 男性が女性と合一したとき, 男性も女性も消滅する」 >.

93.1) まず, われわれに伝えられている四つの福音書の中には, この言葉は見出せず, 『エジプト人福音書』のうちにある. それから憤怒 (thymos) を男性的な衝動に, 欲情を女性的な衝動になぞらえるのは, わたくしには誤っていると思われる. それらが働いた後, 悔恨と恥じらいが伴うからである. 2) したがって, 人が憤怒も欲情も感知せぬ場合, それらは習性 (ethos) と悪しき育ちによって増し高められ, 理知 (logismos) に影を落としそれを覆い隠すのであるが, 回心によって恥じらいを覚え, それらから生ずる靄を剥ぎ取り, 御言葉への聴従によって霊と魂を一体化させるなら, そのとき, 使徒パウロが言っているように, <あなた方のうちにはもはや男性もなく, 女性もない > (ガラテヤ 3,28). 3) というのも, 男性であるとか女性であるとかが区別されるこの身体の形状から脱して, 霊魂は一性へと変容を受け, もうそこには性別は存しなくなるからである. この真正なる人物は, プラトン主義的な考えの下, 霊魂は天上における神的なものであるが, 欲情によって女性化され, この世に来たって誕生と腐敗に至るのだと考えている.

²¹ 紀元後 120 年ごろ生まれた. 護教法・殉教者ユスティノス (後 100-165) の弟子として知られる.

XIV. カッシアノスの論拠に関連する聖書の諸節の解説.

94.1) また彼カッシアノスは、パウロをして強いて「誕生とは迷妄によって成立したものだ」と言わせるが、それは次の箇所による。<わたしは、ちょうどヘビがエヴァを欺いたように、あなた方の想念が、キリストに向かう純真なものから腐敗してしまうのではないかと恐れている> (2 コリント 11,3)。2) だが主もまた「迷妄に陥っていたものどもの許にやって来た」(マタイ 18,11) ことに同意している。だが「迷妄に陥っていた」とは、天上界からこの地上界への誕生のことを指すのではなく(なぜなら誕生とは創られるものであり、それは全能者の創造であって、全能者がより優れたものから劣ったものへと靈魂を貶めることは決してないであろうから)、3) むしろ想念において迷妄に陥っていた者ども、すなわちわれわれのところに救い主が到来したことを意味する。その際われわれの想念は、掟に反した不従順を通じて、われわれが快樂に身を委ねたために腐敗したのである。もしかすると、われわれの先祖である最初の間人は、時を早まり、結婚の恵みに適した時機よりも前に逸って過ちに陥ったのかもしれない。なぜなら女性に対し、欲情の目を向ける者はすべて、彼女に姦淫を働いたのである> (マタイ 5,28) から。これは神の意向の時機を待てないということであろう。95.1) 主自身が実にこのとき、結婚に逸る欲情を断罪したのである。そして使徒が<あなた方は、神に倣って創られた新しい人間を身にまとうがよい> (エフェソ 4,24) と述べるとき、彼はわれわれ、全能者の意向によって形作られた者どもに、形作られたものであるということを告げているのである。そして「古い」とか「新しい」というのは、誕生とか再生とかいうことを述べているのではなく、むしろ不従順のうちに、ないし従順のうちにある生のことを指しているのである。2) かのカッシアノスは、<皮の衣> (創世 3,21) のことを肉体のことだと考えている。この件に関しては後ほど、彼および彼と同様の教説を立てる者どもが迷妄に陥っている

ということを示すつもりである²²。それは、人間の誕生に関しての解釈を、予め述べておかねばならなかった事柄に沿って手がける際である。さらに彼はこう述べている。〈土質的なものに支配されている者たちは、産んだり生まれたりする。「だがわれわれの住まいは天にあり、その天から、われわれは救い主を受け入れるのだ」(フィリ° 3,20)〉。3) われわれは、このことが美しく語られているということも知っている。なぜならわれわれは〈客人としてまた居留者として〉(ヘブライ 11,13) 生活する義務がある。結婚している者は結婚していない者のように(以下 1 コリント 7,29-31)、財産を持つ者は財産を持たない者のように、子供を産む人は死すべき者を生む人のように、財産を省みないかののように、また必要とあらば妻を持たずに生活しているかののように、執着心なく被造物を用い、まったき心からの〈感謝とともに〉(1 テモテ 4,4)、寛容な思いを携えて生きねばならないのである。

XV. 結婚と独身に関する聖書の諸節の解説。

96.1) さてまた、使徒は〈男にとって、女に触れないことは美しきことである。だが姦淫に陥らないように、各々の者は、自分の妻を持つがよい〉(1 コリント 7,1 以下) と語る際に、いわば敷衍的に説明する形で、こう述べている、〈悪魔があなた方を試みないためである〉。2) というのも彼は、克己をもって、結婚を単なる子作りのためだけに享受しようとする者たちに対して〈無節制を防ぐために〉と言っているのではなく、むしろ子作りの領域を踏み越えて欲情を働かせようとする者たちに語っているのである。それはその人が、あまりにのぼせ上がってしまっ、逆に衝動を別の快樂にまで膨らませることのないようにするためである。3) おそらくそのような者は、正しく生活している人々に対し、妬みかあるいは負けず嫌いな心を起こしてでもあろうか、対抗心を燃やし、彼らを自らの陣営に引き入れようと欲して、労苦を伴う克己心を通しての端緒を彼らに提供することを

²² この詳細に関しては不詳である。

望むことがありうる。97.1) そのためであろう、使徒は相応しくもこう述べる。＜熱情に燃え上がるよりも結婚した方がよい＞（1 コリント 7,9）。これは、夫は妻に、妻は夫に負い目を返し、互いに、神的な経緯により誕生に向けて与えられた助力を奪い取らないためである。2) 主はこう述べている。＜父また母、妻また子を憎まない者は、わたしの弟子となることはできない＞（ルカ 14,26）。3) これは、人間という種を憎めと言っているのではない。なぜなら＜父と母とを尊敬せよ、あなたに幸いが訪れるように＞（出エジプト 20,12）と語られているからである。むしろ主は、非理性的な衝動に駆られることがあってはならず、また、一般市民の習慣に妥協することもならないと言っているのである。なぜなら家は種族から成っているのであり、都市は家からできているためである。これはかの使徒パウロも、結婚のことで気遣う人々は＜世を喜ばせる＞（1 コリント 7,33）と述べているとおりである。

4) さらに主はこう述べる²³。＜結婚している人は、妻を追い出してはならず、結婚していない人は、結婚しないがよい＞（1 コリント 7,27）。つまり彼はここで、独身の身分を付加することによって、結婚せず、独身のままでいるように、ということに同意しているのである。98.1) 実に主ご自身が、預言者イザヤを通じて、双方の身分に適わしい約束を、次のように告げつつ与えている。＜独身者よ、「わたしは枯れ木だ」と言ってはならない、主が独身者たちに言われる。なぜなら、もしあなた方がわたしの安息日を守り、わたしの命ずる事柄をすべて行うならば、わたしはあなた方に、息子たちや娘たちに優る場所を与えよう＞（イザヤ 56,3-5）。2) というのももし掟を実行するのでなければ、独身という身分や、独身者の安息日が正義を為すわけではない。3) 一方既婚者たちに対してもこう付言している。＜わたしに選ばれた者たちは、虚しく労苦することもないし、子供を儲けて彼らを呪いに引き渡すこともない。その種は主によって祝福される＞（イザヤ 65,22-23）。4) なぜなら御言葉に従って子供を儲け、育て、主において教育する者には、ちょうど真なる信仰教育を通じて産んだ者に対すると

²³ 次の句はパウロのものであるから、クレメンスの筆がすべったのであろうか。

同様、いわば選ばれた種に対するかのように、相応しき報いが置かれるからである。5) しかるにまた別の者たちは、子を儲けることを「呪い」のように受け取り、彼らとは逆の事柄を聖書が語っているということを理解しない。だが真に主の「選ばれた者たち」は、異端者たちが為すような風に教説化したりしないし、呪いに向けて子供を儲けたりしないからである。

99.1) かくして「宦官」と呼ばれているのは、局部に強いた者ではなく、あるいは結婚していない者でももちろんなく、むしろ真理を生み出さない者のことなのである。この人間は、以前は「枯れた樹木」であったが、御言葉に聞き従い、「安息日を守って」過ちから遠ざかり、掟を実行するならば、正しい生き方をせずに言葉だけの教育を受けた者たちよりも、尊敬に満ちた存在となるであろう。2) 師はこう述べる。〈子たちよ、わたしはまだしばらく、あなた方とともにいる〉(ヨハネ 13,33)。それゆえパウロも、ガラテヤの人々に対してこう命じて述べる。〈子たちよ、キリストがあなた方のうちに形作られるまで、わたしはもう一度あなた方を産もうと苦しんでいる〉(ガラテヤ 4,19)。3) またコリントの人々たちに対してもこう述べ記している。〈たとえあなた方が、キリストにおける養育係を一万人持っていたとしても、父親を大勢有しているわけではない。なぜならキリストのうちに、福音を通して、わたしがあなた方を産んだからだ〉(1 コリント 4,15)、4) それゆえ、〈宦官は神の集いに入ることができない〉(申命 23,1)のは、生き方と言葉において産むことを知らず、実りをもたらさない者だからであり、むしろ〈天の王国のために〉、すべての過ちから自らを遠ざけてしまった者〉(マタイ 19,12)は、世を無縁なものとしているがゆえに、至福なる者たちなのである。

XVI. 誕生を悪あるいは善として難詰する聖書の諸節の解説。

100.1) しかるに〈わたしが生まれた日は呪われよ。祝福されてはならない〉(エレミヤ 20,14)とエレミヤが語っているのは、単純に誕生を呪われたものと言っているのではなく、民の罪と不従順のゆえに忍耐の限界に達し、絶望を吐露しているのである。2) 実際、彼はこう続けている。〈なぜわた

しは生まれ出て労苦と嘆きに逢い、わが日々は恥のうちに終わるのか> (エ
ビヤ 20,18). すなわち、真理を述べ伝える者はすべて、聞く者どもの不従
順のゆえに迫害され、危難を被るのである. 3) <なぜわたしの母の胎が、
わたしの墓とならなかつたのか. そうすれば、わたしはヤコブの労苦もイ
スラエル民族が疲れ果てるのも目にせず済んだであろうに> (エズラ 5,35)
と預言者エズラは語っている. 4) <汚れを免れて清い医者は一人もいない
>, ヨブは述べる. <一日たりとて、その人の生命が思いどおりになる日
はない> (ヨブ 14,4 以下). 5) 「生まれたばかりの嬰兒がどこで姦淫をした
か」とか、「何もしていない子供が、どうしてアダムのかいによって変節し
たりしようか」と、われわれに向かって言う者がいるとしよう. 6) 思うに
彼らは、これに続いて「誕生とは悪しきものである. 肉体の誕生ばかりで
なく、靈魂も、それを通じて肉体も成立するのだから、その誕生は悪しき
ものである」と言うに違いない. 7) またダビデが「わたしは罪のうちに懐
胎され、わが母親は、わたしを咎のうちに懐妊した」(詩編 50,7) と述べ
るとき、この母とは預言的にエウアのことを指している. 実に、「エウアは
生ける者どもの母」(創世 3,20) となったのである. けれども、もし彼が
罪のうちに懐胎されたとして、彼が罪のうちにあるのでも、彼自身が罪な
のでもない.

101.1) しかし罪から信仰へと立ち返る者はすべて、いわば罪深き「母」
の習性から生命へと立ち返る. わたしの証人は十二預言者の一人であり、
彼は「もしわが不敬を償うために初子を、わが靈魂の罪を償うためにわが
胎の実りを捧げるならば」(ミカ 6,7) と述べている. 2) 彼は「生めよ、増
えよ」(創世 1,28) と語る方に反発しているのではなく、ただ誕生に発す
る最初の衝動—それによってわれわれが神を知ることではない—を
「不敬」と呼んでいるのである. 3) もし誰かある人が、このゆえに誕生を
「悪しきもの」と言うのであれば、同じ理由から善きものとも呼ぶがよい.
誕生において、われわれは真理を認識するのだから. 「正気になって身を正
せ. 罪を犯してはならない. 神を知らない人がいるからだ」(1 コリント 15,34).
<神を知らない人>とは言うまでもなく、過ちを犯す者どものことである.
「わたしたちにとっての戦いとは、血や肉に対するものではなく、諸々の

霊的な存在を相手にするものなのだ」(エフェソ 6,12)。「闇の世界の支配者」たちは、試みを与える能力を持つ。従ってこの<戦い>とは、忍耐ということである。4) それゆえパウロもこう言っている。「わたしは自分のこの体を打ち叩いて服従させる」(1 コリント 9,27)。なぜなら「競技に参加する人は、みなすべてに関して節制する」(1 コリント 9,25) からである(つまり<すべてを控えることで、すべてに対して節制する>のではなく<用いるべきだと判断した事物を、自制心をもって用いる>のである)。「彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、われわれは、朽ちない冠を得るために節制する」(1 コリント 9,25)。拳闘で勝利を収めるにも、苦闘せずに冠を頂くことはできないのである。5) 確かに、処女よりもやもめの方を、自制心ゆえに尊敬する人々もある。それはやもめが、すでに味わった快樂よりも、自制心の方を尊重しているからである。

XVII. 誕生とは悪であると主張することは、 創造と福音への誹謗であること。

102.1) さて、もし誕生が悪であるならば、誕生を誹謗する者たちは、誕生に与かった主、および主を産み落とした処女²⁴をも悪のうちに置くことになるが、彼らにはそう言わせておこうではないか。2) ああ何たる悪事であろうか、彼らは誕生を中傷することで、神の意向と創造の神秘を誹謗しているのだ。3) それゆえにカッシアノスの仮現論、つまりマルキオンの仮現論、そしてウァレンティノスにおける「魂的身体」はみなこの類なのである。なぜなら、詩篇作者はこう語る。<人間は家畜になぞらえられる>(詩篇 48,13 ; 48,21)。それは、交合に血道をあげる者のことである。しかしながら、人が本当に他者の妻と交わることを望み、それに逸ったならば、そのときそのような者は真に、獣に比せられる。<彼らは女狂いの馬と化し、各々隣人の妻を慕っていななく>(エレミヤ 5,8)。4) たとえ非理性的な動物からヘビが交合の営みを取り入れ、アダムに対し、エヴァと交わるよ

²⁴ クレメンスが聖母の処女性を表明した箇所として注目される。

うに説得したのだとしても（これはある人々がそう考えているように、最初に創られた人間たちがこの本性を享受したのではないとするためである）、やはり創造行為は、人間たちを、理性を持たない動物たちの本性よりも弱いものにしたとして誹謗される。神によって最初に創造された人間たちが、非理性的動物に従ったためである。103.1) だがもし自然が彼らをして、理性を持たない動物と同じように、子作りへと導いたのであるなら、彼らは、まだ若くして適当な時期よりも早く迷妄に打ち負かされて促されたのであり、神の意思を待つことができない者たちに対する神の裁きは正しく、誕生は聖なるものである。誕生を通して世界が成立し、誕生を通して、諸実体、諸本性、諸天使、諸力、諸靈魂、諸々の掟、諸律法、福音、そして神に対する覚知が形成されるのであるから。2) そして＜肉はすべて草木のよう、また人間の栄養はすべて草木の花のよう。草木は枯れ、花は萎れる。だが主の言葉は留まる＞（イザヤ40,6-8）。主の言葉は靈魂に油を注ぎ、身体と合致させるものだからである。3) いったい、身体なくして、教会すなわちわれわれに関わる経綸が、完成を迎えられたらどうか。主自身が、肉のうちにある教会の頭であって、姿と形なく来たり、われわれに対して、神的な原因の無形性・無姿性に目を注ぐように教えるのである。4) 預言者はこう述べている。＜生命の木は良き望みのうちに立つ＞（箴言13,12)。これは、洗練された浄らかな望みは、生ける主のうちに置かれるということ教えるものである。104.1) しかるに、男性が結婚によって女性と交わりを持つということが「知識」(gnōsis)と呼ばれていて、これは罪だと解しようとする人々がすでにいる。彼らが言うには、なぜならこの知識こそ「善と悪の木を食すること」によって表されていることであり、「知った」という意味を通じて、掟からの逸脱を教えているのだという。2) だがもしそうであるなら、真理の知識もまた、＜生命の木＞（創世2,9)を食することである。であるから、賢慮を伴った結婚とは、やはりこの木に与かることである。3) われわれにはすでに、結婚は美しくも悪しくも享受することができるということが語られた（『ストロマテイス』3.15.96.1以下)。そしてこのことこそ、結婚の掟を踏み外さない限りでの＜知識の木＞（創世2,9)なのである。4) ではどうなのだろうか。救い主は、靈魂と同じよ

うに、肉体をも情動から癒すのではないだろうか。もし肉が靈魂の敵であるなら、この敵意に対し、主は健全さでもって備えを行い、靈魂の守りを固めたのである。5) <わたしが言いたいのは次のことである。すなわち、肉と血が神の王国を継承すること (klēronomein) はできず、腐敗が非腐敗性を継承することもできない> (1 コリント 15,50)。すなわち、罪は腐敗であるから、非腐敗性、すなわち正義と交わりを有することはできないのである。使徒は述べる。<あなた方はそれほどまでに思慮がないのか。霊によって始めたのに、肉によって完成させようとするのか> (ガラテヤ 3,3)。

XVIII. 結婚は回避すべきであるとする見解の行き過ぎ。

105.1) かくして、救い主の告げる正義と調和性は、崇高かつ確固たるものであるにもかかわらず、すでに示したように (『ストロマテイス』 3.5.40.2)、克己をあまりに強調し、可能な限り神を恐れぬあり方でもって誹謗的に受容する者どもがいる。だが実は敬虔さを伴った健全なる規範に照らし、独身を選択することができるのであって、与えられた恵みに感謝しつつ、創造を憎むことも、結婚している人々を軽蔑することもせずにいるべきである。なぜなら世界は創造されたものであり、独身も創造されたものであって、双方とも、そこに定められたことの意味をよく覚知したならば、そこに定められたもののうちで感謝すべきことだからである。2) だがその一方で、このような掟を逸脱して傲慢に陥り、本当に<女狂いの馬のようになって、隣人の妻たちを思っていないなく> (エレミヤ 5,8) 者どももある。彼らは自制的に振舞うことができずに風紀を乱し、隣人たちをも快樂に耽るよう説得する。彼らは、次の聖句を不幸なあり方で理解しているのである。<あなたの運命をわれわれとともにせよ。われわれはみな、共通の財布を持ち、かばんもわれわれ皆で一つにしようではないか> (箴言 1,14)。106.1) 彼らの故に、同じ預言者はわれわれに対してこう勧告して告げる。<彼らと道を共にして歩んではならない。あなたの足を彼らの道から逸らせ。網は、翼あるものには訳なく懸かるものではない。彼らは血を分け合い、自分たちのために悪を蓄えている> (箴言 1,15-18)。すなわち彼らは、不浄な

るものを追い求め、隣人たちにも同様のことをするように教え込む。彼らは預言者の言う「争い好きで、自分の陰部を打つ者」（典拠不詳）であって、ギリシア人であれば彼らのことを「恥部」と呼ぶところである。2) この預言は、彼らのことをほのめかしているのもあろう。頹廢的で、自制心がなく、自分の陰部でもって争い、闇と「怒りの子ら」（エフェソ 2,3）である。人の血に飢えた殺戮者で、隣人の殺害者である。3) 「古いパン種をきれいに取り除くがよい。あなた方が新しい練り粉でいられるように」（1 コリント 5,7）と使徒はわれわれに叫んでいる。彼は、そのような類の者には嫌気を催し、こう命じている。「兄弟と呼ばれる者で、姦淫に耽る者、強欲な者、偶像崇拜に陥る者、人を罵る者、酩酊に陥る者、略奪する者があれば、彼らと付き合ってはならない。そのような者とは食事を一緒にしてもならない」（1 コリント 5,11）。4) 使徒は述べる。「なぜならわたしは、律法に対しては律法によって死んだ。神に生きるためである。わたしはキリストと共に十字架に付けられた。生きているのは、もはやわたしではない」（ガラテヤ 2,19）。それまでわたしが欲情に生きていたようにではなく、「わたしのうちにはキリストが生きている」、掟への従順を通じ、浄らかに、至福のうちに、である。かくして、かつてわたしは肉のうちに肉的に生きていたが、「今では肉のうちに生きているものの、神の子への信仰のうちに生きている」。107.1) 「異邦人たちの道に行ってはならない。サマリヤ人の町に入ってはならない」（マタイ 10,5）。主は、逆行する生き方からわれわれを引き離してこう述べる。「なぜなら不法な者どもの末路は悪しきもの。これこそ、すべて不法を為す者の道」（箴言 1,18 以下）だからである。主はこう語る。「ああ、その男は呪われよ。彼にとって、選ばれたわたしの者を躓かせるよりは、生まれてこなかった方が良かった。あるいは彼にとって、選ばれたわたしの者を墮落させるよりは、手足を切り落とされ、海に投げ込まれるほうが良かった」（マタイ 26,24 ; 18,6）。「なぜなら神の名は、彼らによって誹謗されているからだ」（ローマ 2,24）。3) ここから真摯に使徒はこう述べる。それは「わたしはあなた方への書簡の中でこう書き記した。「姦淫を行う者どもと交わりを持つな」から、「身体は姦淫のためにではなく、主のためにあり、主は身体のためにいるのだ」までである

(1 コリント 6,13). 4) また彼は、自分が結婚を姦淫であるとは言っていないということを、次のように付言している。〈果たしてあなた方は知らないのだろうか、遊女と一緒にいる者は、彼女と一つの体になるということ〉 (1 コリント 6,16). いったい、結婚する前の処女を遊女と呼ぶ者が誰かあるだろうか. 5) 使徒は言う。〈あなた方は、互いに拒んではならない。ただ、時が満ちるまで合意して離れているという場合は別だが〉 (1 コリント 7,5). ここで「拒む」(aposterein) という表現でもって、結婚に伴う義務、すなわち子作りを強調しているのである。このことを使徒は、それ以前にもこう述べて明らかにしている。〈夫は妻に対して責務を果たし、同じように妻は夫に対して責務を果たすがよい〉 (1 コリント 7,3). 108.1) この責務の完済にあたり、家事においてもキリストにおける信仰にあっても、夫婦は互いに「助け手」(創世 2,18) である。使徒はさらに明瞭にこう述べる。それは〈結婚している夫婦に、わたしではなく、主が命じる。妻は夫から別れてはならない(もしもう離縁してしまったのなら、結婚せずに留まるか、もしくは夫と和解せよ)。また夫は妻を去らせてはならない。それ以外の人々に対しては、主ではなくわたしの考えとして述べる。もし誰か兄弟である信者がいて〉から、〈今すでに彼女は聖なる者なのだから〉までである (1 コリント 7,10-12 ; 7,14). 2) これらの箇所に関して、律法に反対し、また結婚に関しても、律法によって認められているだけで、新約にあってはそうではないと難じる人々は、どう述べるのであろうか。精の漏出と誕生とを嫌悪する者たちは、これらの掟の規定に対して何を述べることができるのであろうか。というのも使徒は、〈家庭を立派に取り仕切る人が、司教(episkopos)として〉教会を管轄するようにと定める一方(1 テモテ 3,2 ; 3,4), 主の家を成立させるのは〈一人の妻〉 (1 テモテ 3,2) との共なる絆だということであるから。109.1) 使徒は語る。〈浄らかなる者にはすべてが浄らかであり、穢れた者・不信仰なる者には、浄らかなものは何一つなく、彼らの理性や良心までも穢れている〉 (テス 1,15). 2) また、規範にもとる快樂については〈迷妄に耽るな〉と言う。〈姦淫に耽る者、偶像崇拜に陥る者、姦通する者、柔弱な者、男色に耽る者、貪る者、盗む者、酩酊に陥る者、罵る者、略奪する者たちは、神の王国を継承することはできない。

われわれは洗い浄められているのだ> (1 コリント 6,9-11). つまりわれわれは、神の王国のうちにいる。しかしながら、これらの好色へと身を洗った者たちは、賢慮から姦淫に向けて洗礼を受けたのであり、快樂と情動を享受するように教説化し、賢慮から非自制的なあり方に移るよう教え、自らの希望を四肢の破廉恥へと捧げている。神の王国を受け継がず、むしろ弟子として登録されないように準備し、偽りの覚知を標榜して、外界の闇への導きを受け容れているのである。3) <兄弟たちよ、これからは、真実なること、崇高なこと、正しいこと、浄らかなこと、愛すべきこと、誉れあること、徳や称讃に値すること、そういった事どもを考えよ。あなた方が学び、受け容れ、耳にし、わたしのうちに見たもの、それらを行うがよい。そうすれば、平和の神があなた方とともにおられるだろう> (フィリ° 4,8). 110.1) ペトロも、書簡のなかで同様の事柄をこう述べている。<あなたがたの信仰と希望が神に向かうように、あなたがたの靈魂を、従順の子として、真理への従順のうちに穢れなきものとし、2) かつて無知のうちにあったときのあなた方の情欲に倣うことなく、あなた方を招く聖なる方にならって、あなた方自身もあらゆる振る舞いにおいて聖なる者となりなさい。「わたしは聖なる者であるから、あなたがたも聖なる者であれ」(レ° 19,2)と記されているのだから> (1 ペトロ 1,21 以下).

3) だが、覚知をめぐる誤った偽善者たちに対しての反駁は、やむを得ないことではあるが必要な分を過ぎ、われわれを逸らせてさらに長い論述へと遅延させた。このあたりで、われわれの『真なる哲学による覚知の覚書：ストロマテイス』第3巻を閉じることにしよう。